

惺陰卷錄

昭和八年二月起筆

二

特別  
14  
1919  
450





176715

博洽巻第二

昭和八年二月中浣起筆



○李家正文とまゝ人の著しは厨友ハ五百有汗の巨の命を一厨に  
 関し了る証やも所収やも東西の事字がまゝに字を正集してある  
 所も題目を研究しとよむある、後して又も其のよむやも  
 ることか終り無の随分むる居ることか深山叔まうてみる、  
 考考候に聞しことか随分深山叔まうてみる、誰れかもそのの  
 法と持つてある、身人の試みる、此者中へ缺けをみる思ひ出を  
 一寸片紙へヘッド文を書きつけ見れば約三十枚も功もある  
 の中からつまらんことも交うが閉る位でも漫語介へかへ  
 て見る。



第六卷白山

京都徳利堂原色寫眞版















源の石の三溪園に於ける遺築の廁をいかにその一例に  
ある。

昔一身分ある人の旅行する罪輿の中に入ると  
向を柱を置して不時の用の供に此をト筒と稱し  
暹羅の家来が是を司つたときのことだが、是の爲  
おもしろいのは大便の具と云ふところからしての大  
がねにあり、大便の足が不自由にあらうから旅行の  
に必ずしも此の便器が伴つた。此の天皇家に陸奥  
幸の時、大使器がいくつも行幸中にあると  
見えてゐる。

時令時と不潔を催し、せむしと云ふれしことが  
又とある。痛窟の坊主も無んく逃けたる事あり、ま  
さか思ひんる。源信の廁、上つてみる。敵の間諜が餘  
を突き殺し、とまふ説がある。史家のいんをどう見て  
ゐるか、一も廁話の序を考ふつけおく。

自今が奉天から北京に行く時、美田米の一等汽車の  
の寝台の始の比、谷あれ、北の窓にあり、その窓に隣つ  
て便器のあり、洗面もあつたが、まづ他の寝台のとも、  
じつと朝早くも、洗面の起き、と排せると隣室  
の西洋人が全裸体で洗面してゐるのを見、其が癖か、  
ことある。吉田半平が西洋にゐるおてびの横濱後  
に西洋の廁を多く日本に俄が用ひてゐる、まづ、其の







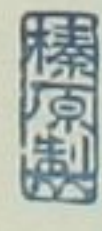




の意息か意内は深つておのここといふ、由地人の昇  
か意息に換へんを思ふがの感にうかが、憐れまのよ  
い飯程つよと感するといふ

此の書畫をよの廣道もさういふか化る作母に古毛  
の色付をさうさう紙や絹を使わの上類に吊るしア  
ンモニヤ作母に古毛をつけるといふ、亦不便を紙を塗  
りの七法にさへ入れたが流るゝは、いふを思ふと廣  
物いさすくいやさ氣持がさす

田舎の舊家さかをゆゑを毎に不愉快を感するのいさ  
者廻りの飾りまや掃除の届いてあるか雪隠の  
掃除の概し届らる、雪隠をいさかから、紙の出来  
がわつてゐるさす。亦不愉快さるゝ、古毛は昔



履もさういふと供さすといふ、さう困るた履さ  
と日便おま下駄を用ひてゐて、さうの者か高  
くさして候下の不たが、いさか不愉快の  
るか、或る旅舎に下駄の出来に、工を杜おし  
れまを用ひてゐれば、いさか不愉快さるゝ、  
いさか思ふに。

自分の思ひ出流い此位うも李家の側考ある  
逸話と二三描ねする

由田保●に歐陽修の言が載せてある、是れ  
掃こと、余が平生必す不の文章、多く三上  
ま、まるといふが三上と云ふの、馬上、枕上、側  
上をさるゝ、いさか、詩人や文人の多く側



此思構を鍊つ、四府分ち屋か飯田町に宅を  
し此頃隣に歌人長谷有文の家がある家の便  
不か垣根一重を隔てお別してある、底の若  
し股若菜の音もよく聴く、ち屋厠の上  
つて無中、思指を鍊つてあると、隣りの厠に  
音かきものをも自分かると心付て用を忌む事  
出てきると云ふといひ一笑を位する

一山田熊氏の松屋著記に云く胡元瑞が著  
書續集、甲乙刺言に厠籌の條あり云、  
有客白謂余曰、嘗安安平、其俗如厠、里  
皆用瓦礫代紙、殊為嘔穢、余笑曰、安平昔  
唐制為博陵縣、然為々縣人也、為奈何、客曰、

彼大家道、亦當必與俗自異、余復笑曰、請  
為君盡、厠中二事、北齊文宣帝如厠、令  
楊情執厠籌、是皇帝之尊、用厠籌  
而不用紙、三石室律師上厠、法又厠、厠籌  
是比丘之淨、用厠籌而不用紙、觀之厠  
籌、瓦礫也、不能不為苦、要重掩鼻  
耳、客為噴飯、洩矣、云々、其法あるに、  
ハ今も記に見え、李紳蘇軾らも訓に心  
し、  
今皇朝、山家の百姓、或は厠籌を用ひ、或は  
葉屑木草の末を用ひ、糞を拭ひ甚し  
き事あり、  
厠儀に繩を張る事を跨りて



虎穴を拭きあつたらん、と胡元瑞驚くが虎の  
毒共臭をおもひ出で、其後社齊主文宣帝、  
南山道宣律師に及ぶ、蔡命儀を制衣、とき  
前、何をもち拭ひけん、布帛をを用ひけん  
娥皇、女英、妹喜、妲己、大姜、褒姒、毛嬭、西  
施、鄧姫、実氏、薄姫が後門もおぼつゝを  
し、衣通姫のおもひかゝるゝ臭気あけ  
んとぞ思ひやう。

一 早麩はちやの奥の香具の山と云ふ川柳が  
あつちやの寺の廁のすて不浄を流すや  
うらうらとあるから、早麩は濁あすると川  
柳のつゝあやうらうら、ちやの香具の暗渠を



流して其の似に河出川と唱く、おさあ川に出るが  
まゝう終り形儀とらう、まゝの大流とも云ひ香具  
流とも云ふところ、流ぬれちい折程に浄化せぬと  
流の臭気がういとまゝんとある。

忠實のちや玉川の後、うら

谷川や風にいれいふ月の香具

一 未回の香具の行かうとまゝのいたり隠れがある

Let me go to church

Let me go to Mrs Johnson

一 仏法大師以来未解決のまゝ放任と云ふ香具山の床  
席問答金片つゝ、山の上の僧侶二十五人登山あり



昔人と見え全胎力部の康康一巻六千五百立方尺  
仙西原式の淨化装束を以て故海をくゞ、極及びけり  
林蔭村の心々依つてあり

○入洋連支(醫官協士)予と郷國を同くす往年余  
大患に罹り又治事瘵を多くと数年交情厚し近年  
緬忘今今に於て處々相令々何時も余公法敵多し此人  
漢詩を善くす、五言在廿の日二三の詩を不きく、而も  
只全難と知くす、而も余の頃日自から詩を刻く一部  
を贈らん始もを只の全難も兄を得たり、爰吟を送る  
七の多し、今左に予の四和の人：漢才を詩四五を抄す

送在谷川醫官協士(寅次)赴任全洋政而後  
次十七年



不奈難愁侵肺肝、強肝痛飲且成歡、學勤學智  
徒何易、術究刀圭古定難、以禮為羅合賢令  
尹張筵送別舊全蘭、加妙此去三千里、天外白山  
殘雪寒寒

奉壽叔父竹山香山翁也古稀次其款  
的次四十二

休言心々先成空、養浩由來知有功、雙鑠凡姿期  
大老重、今昔光說古稀翁

新沼行形亭亭真吟行城招飲酒間賦  
大正三

風送濤聲月影動、山亭剪燭話前因、差次表  
古此林泉重、美較世間名利人

卅年賦得大刀孫、又邀秋風入故山、保氣安雖在  
未能隱、可也鬪鬪光蒼案  
張問陶有句云、無奇  
久被青山笑、欲隱其



如绿生夏何

葉山村在即事次湯原為元一見寄詩類大正六

秋潮浴罷倚闌干，積雨茫茫帆影殘。日動紅輪春

欲返，紫雲蒼翠巖閣前看。

釣人或處住江干，戶戶曬蓑鐘鼎殘。如君江南

平樂生，內詩一卷曲肱看。

扶老杖題詩應久待，笑雪為公為瀟。

三尺仙印板公標，蒼翁截竹轉為彫。欲云扶老百年

後，餘款流風終未消。

讀游心泉瑤壠口占城九卷一

游心泉出忽馳名，大業從橫奉世功。北城盤壘多傳

秀，長城文豈遠春成。



雲在○後○の人多くや七讀之、以上ハ准比、予ハ尤も親暱の

関係あり、下集ハ、（抄）、此等ハ、詩者ハ、予ハ尤も雪夜の大

苦漢を、あゝハ、すゝまゝ、あゝ、知、左々

高田於詩之一 丙辰廿二年

終云、（抄）、别有天、沙路必海系、晴妍、蟹紅魚白

村々酒、社鼓、篝燈、浦々煙、漁信、影斜、合夕、照ハ

竹枝歌、開祝、豊年、流連、座、莫、歸、期、失、一、榻、倚

几、曲、臂、眠

将赴奥州賦似友人

我送春時春送我，春将盡日我將如。春風吹我

那送到，衣衣福山東奥州。

送末山 丙辰二十二年







字本と崇禎版本と能く異同少く、谷村今次の刊本  
仔細に異同を注す、亦各地名の解し難きもの皆載せ  
録し考証あり、荒し、免格を日本行録の在本と  
求むる人あるべし之に就て又人ことをす、あ、こ、り  
一、本也



平常の鶏

卵の美味も黄名人に習ふ美味と醋包推す白味も  
白人に習ふ。滋養の都合は美味であつて白味は多く、  
てらりと云ひしことあるが、此の人程悦び同巧吳者と云ふ  
て可なり

○外人が日本に来て初めから日本を惚んこまよがし、いくら  
長く日本を居ても日本を嫌ふ外人もあらう。多くは認識  
の乏しう、初め抱いた誤解がいつ迄もつき纏ふこと  
する。原因はいろいろある。外人の考いた日本紀行も日本

標記

の家畜のことを云ふ條に、日本の畜産や禊をいふ氣持  
がよいが、その厠の愛想がつき、米を尿を糞を糞を  
らまい為め蛆がうわくしあつて、糞が為め茶をすく  
めんじや其の縁の毛が尿を糞を糞でしあつて飲む  
氣になるんやういふ。日本の常人は米がある。蛆イナゴ米粒に似  
てゐる。米粒を喰ふからあんな糞が溜くのだからと、こ  
んなことを臆怖するやうに書いてゐる。斯る外人ハ利権日  
本を好まざるやうにぬ連中であらう。兎前外人ハ利権日  
本の認識を述べてゐることが必要であつて、外米の産地を  
しるや大抵な任務を帯びてゐるものだから、イナゴがあるが、  
日本のイナゴや頭胞が喰ふや糞を糞に西洋産も自在  
びるべから、正當の認識を述べてゐる能わらう。亦後成る



の辨説もつておる。そこは白人の寄つて外客旅行  
の第一準備としてガイド改良を説いたこともある。此頃  
米國も早く始めて日本のもつても特道し英語も達者であ  
る人が外人とせし語りしれ旅を歩いたが汽車いふ驛  
を道あると米商を考へて語りがよくするの如く外人は  
あれい何れと云ふから、相手の日本人は、鳥領の折  
を意から買つて、差を測いて白人に示し、んちキ  
ライ大だ、そして其價の僅かに二十、幾ひある、合つて已  
にいるうらうらうのよんを考へて、コンナ廉價に  
法の合物か汽車いふ合つたかと思ふは、外人は成る程  
と合つて此又ある驛も考へて、少女が花を愛つて  
おれ。差を相手の日本人が十枚投して一束の花を購

れ、差を相手の日本人は花を愛するから汽車は  
乗つての間に花を親しく習慣があるといひ、さし  
たの外人は成る程と大いさ感へた。今度の汽車を新  
てある山村を歩つて、さうさうさうさう、年の若い婦人が  
野菜を採り、あつたあつた出遇つた。女の人があつた  
まづて外人に説いて、三ふふ、これを見よ、農家の食  
しい女子は、現に此より労働の服を着るものだが、粗末  
乱さず、チヤンと従ふ。車轡や帯も粗末さうさ  
年相應のハデな深文袂がある、前垂七チヤントつけて  
おる日本女子は労働の体なると云ふ、身ナリの注意を  
怠らぬ、西洋の労働女子はコンナよめがあるかといふ  
て、外人は説くも成る程と感へたといふが、斯く



秋も説く時がイロが荒し日本もあつたといふは、恐  
 らく外人の日本事情を叙述し認識することである  
 日本の天地を外人の理解の出来るものか満ちたし  
 むるをよきと評する外人の説くものも外洋の権威は  
 まげん、さういふものも、外國のさういふもの  
 日本のものも通するものも無い。即ちこの  
 例も挙げれば日本人の如きものは、さういふもの  
 といふあるが、日本と世界の誤りもさういふもの  
 もがイロ改善が必要である。

藤原製

# 其石



## 無電碁の間違ひ

東は鈴木偽次郎七段、西は光原伊太郎六段  
 ラヂオで碁を打った。  
 東京方の説明役、瀬越憲作七段、大阪方の  
 説明役久保松勝喜代六段。  
 これが一般ファンには相當受けがよい。  
 が、玄人筋では餘り評判がよくない。  
 一手に一分以上考へられないのだから、如  
 何に六段、七段の高手と雖も、必ずしも好い  
 手ばかりは打てない。  
 つまり、早碁だから仕方がない。  
 それも二人相對して打つてゐるのなら間違ひ  
 もあるまいが、一人は芝の愛宕山にゐて、對  
 手が大阪放送局にゐるのだ。  
 ラヂオの聞き違ひが妙な喜劇を生んだりし  
 て、碁そのものよりも、餘興の方が面白かつ  
 たりする。  
 白百六の手は「十四の十七」に打つた。  
 すると、黒百七の手は「十一の十」に打つ  
 て來た。

餘り不思議なので、東京方の説明役瀬越七  
 段が、

「今の手はどこへ打つたのか？」  
 と訊き返して見た。

すると、

「白百六の手はどこへ行つたのだつたか？」

と、久保松六段から反問して來た。

「十四の十七だ。」

といふと、

「いや、それならこつちの打ち方も違ふだら  
 う。白百六は『十一の十一』と聞えて來たの  
 だつた。」

といふことで、黒百七を「十五の十七」へ  
 打ち直して來た。

一と四と七、この數字の音が似通つて聞え  
 るところから起つた喜劇であつた。

何さまありさうなことではないか？

この間違ひがまた人氣に投じた。

實際、人氣なんてどこから生まれるか判ら  
 ないものだ。

「ラヂオの碁は二手間違つたさうだね。」

なんて、六段と七段とが打つてさへ、早碁  
 を打つと間違ふこともあるんだから、吾々の  
 碁はちよいと間違つても當り前だなんて、  
 とんだところにジャステイブイケーションな

求める人もある。

早碁だから間違つたんぢやなくて、數字の  
 音の聞き違ひがもとだといふことは、腹の中  
 では知つてゐても、そいつは黙つて藏つて置  
 いて、六段と七段とでも間違ふといふところ  
 に力點を置きたがる。

ちよつと面白いファンの心理だ。

が、ラヂオ碁は、興行としては成功した方  
 であらうし、これからも時々面白いであら  
 う。

だが、ラヂオ碁に名譽を求めやうなんて考  
 へてゐるや、木に攀つて魚を求めると類の痴に  
 似たりと云へやう。

昔は飛脚碁、そんなものはなかつたかも知  
 れぬが、郵便碁といふものは、今でもぼつぼ  
 つ違つてゐる向があるらしい。

それから、電信碁、これは明治年間の新開  
 政策として一つの成功を収めた。

今や、ラヂオで碁を打つやうになつて、フ  
 アンはそれを聞いて、こつこつ碁盤の上に並  
 べて興じてゐる。

碁の打ち方も、文化の進展と共に色々新工  
 夫があるものかなと、翁どもが驚き合つてゐ  
 る。(胥坊文)







正つたのいふに元はのまゝのひある。詳しく云ふ  
日崎士が處に先づべつ未亡人を訪はる。こうち  
圓く、其家いよく来の上品を支ぬ人、合  
ひまゐか有名を彦彦の未亡人此と信ふと  
れひある。崎士、別もさく之を私に告げら  
ん。自ら調査せん。此に依つて次のやうな  
ことと流せん。未亡人の銀子と云ふ江戸の人  
彦彦が時代上りの書物の山屋にうし松本  
家、美奈の(本姓松平)の元初年、江氏に嫁  
し。江氏の他界、元元三十年十二月十二日  
あるが、然る遺しといひ、見老子の其時改  
め、元遠しとある。阿もさく出明の人本間義



次郎と嫁し。本名氏、酒田本間家の分家也。  
其の元元二十七年、東京幕府の理科を卒業  
し。元元四年、後、廣島高等師範校の教  
授とす。其の専攻を以て、理名、崎士の  
位と授けん。其が不幸壯年、うして歿し。本間  
家、一男子あり、現に主英大、表がとん。即  
ち江氏の孫に也。本名氏、丹子の元元未亡人  
其健在ひある。  
入澤崎士の江氏未亡人、自ら傷下巻の譯稿を  
のこす。其の元元上巻、元元と土方久徹表の邦譯  
がある。土方君、下巻の翻譯、着手し、進ま  
ず。其の元元、生り所、江氏、友人に托し、



別下巻の邦訳を終らしめ此の出来るべくは直  
くは美を出版する。意圖のあらはれしこと、**海軍**の  
らにせしむる数字を貰つて来たる由つてもふか  
何れの礎があらうと急速に利の運むるもくが  
其内本人の折去と依て出版の流も自ら立消  
えとせしむる。洋務の其後遺族に依て送る  
深く秘めしものもあつた。然らば未歴か  
つたのむこの洋務を入洋務士の提示するや遺  
族の方へと出来るものもあつた。之と出版して  
の遺族を先づいふことの漢文を希望を表  
わさん此のむかし。

先づ此書と海軍の詩と切らうと一後するは先づ



海軍を指すの在りぬ

二月廿日記

ジヨセフ、ニコの自叙傳の初を出しに土方久徹が海軍教士  
の名で譯ししもの、**海軍**社に印行せしめてゐる。標題は「深流  
異譚 海軍の編」とする。とんへ今稀歎のむかし  
るが、むかし行せん自叙傳の解説は見え、可う者  
略して日本人向きに譯ししものと、今今が  
ハ有暇にえに下まむも悉くを文をのくり譯してゐるとも  
ニコの姓は「深流」に自叙傳は「海軍」と生家の回がとてゐる  
か、生家も存せしむる。むかしの家がむかし、彼への凡そ来りし派  
るものむかし、むかし、**海軍**社に似ては、むかし、むかし、  
舟乗り、深流者と云ふ、むかし、むかし、**海軍**社に似ては、むかし、  
むかし、むかし、むかし、**海軍**社に似ては、むかし、むかし、



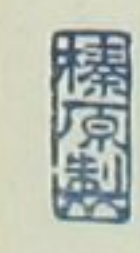
亞米利加の教育を受け、主派は英譯を繰り録すの秘古  
官をやつて、その者前を自から心づくとその保れひるひ  
彼んの本國に歸つてから、両方、關係ししが皆失敗したの  
ハ彼んの素戔射利、法治であつたが、あつたといふ。彼ん  
ハ主<sup>身</sup>去世の模合が無つた譯ひも無つたといふ。事<sup>身</sup>を<sup>身</sup>と換へん  
の<sup>身</sup>の名利、念が無つたが、あつたといふ。彼んが、四の<sup>身</sup>  
を<sup>身</sup>なくして、人<sup>身</sup>も、木<sup>身</sup>も、え<sup>身</sup>伊<sup>身</sup>後<sup>身</sup>隆<sup>身</sup>之<sup>身</sup>井<sup>身</sup>上<sup>身</sup>替<sup>身</sup>る<sup>身</sup>が<sup>身</sup>あ  
つた。彼んが、切<sup>身</sup>意<sup>身</sup>心<sup>身</sup>が<sup>身</sup>あ<sup>身</sup>つ<sup>身</sup>た<sup>身</sup>が<sup>身</sup>、<sup>身</sup>在<sup>身</sup>南<sup>身</sup>の<sup>身</sup>地<sup>身</sup>位<sup>身</sup>を<sup>身</sup>得<sup>身</sup>た<sup>身</sup>こと<sup>身</sup>が<sup>身</sup>未  
して困難ぢやうなつてあつた。彼んが日本の文化の考へて、<sup>身</sup>支  
那<sup>身</sup>年<sup>身</sup>刻<sup>身</sup>と<sup>身</sup>早<sup>身</sup>く<sup>身</sup>海<sup>身</sup>外<sup>身</sup>新<sup>身</sup>の<sup>身</sup>を<sup>身</sup>考<sup>身</sup>へ<sup>身</sup>た<sup>身</sup>。曰<sup>身</sup>一<sup>身</sup>檢<sup>身</sup>査<sup>身</sup>が<sup>身</sup>あ  
つたから、行<sup>身</sup>した。他の<sup>身</sup>行<sup>身</sup>が<sup>身</sup>あ<sup>身</sup>つ<sup>身</sup>た<sup>身</sup>けん、<sup>身</sup>も<sup>身</sup>あ<sup>身</sup>つ<sup>身</sup>た<sup>身</sup>と<sup>身</sup>混<sup>身</sup>同<sup>身</sup>して、<sup>身</sup>  
さうなつた。當時、あつたことを考へて、<sup>身</sup>持<sup>身</sup>ち<sup>身</sup>早<sup>身</sup>く<sup>身</sup>此<sup>身</sup>の

徳川

江戸の發行、ハ彼んが、和書と併せ、二十<sup>身</sup>五<sup>身</sup>位<sup>身</sup>の<sup>身</sup>意<sup>身</sup>  
刊<sup>身</sup>を<sup>身</sup>由<sup>身</sup>義<sup>身</sup>ら<sup>身</sup>う<sup>身</sup>と<sup>身</sup>な<sup>身</sup>つ<sup>身</sup>た。彼んが、自<sup>身</sup>記<sup>身</sup>の<sup>身</sup>傳<sup>身</sup>を<sup>身</sup>、<sup>身</sup>價<sup>身</sup>を<sup>身</sup>抑<sup>身</sup>つ<sup>身</sup>た<sup>身</sup>譯<sup>身</sup>  
考<sup>身</sup>ハ、僅<sup>身</sup>か<sup>身</sup>ハ、二<sup>身</sup>人<sup>身</sup>ハ、無<sup>身</sup>つ<sup>身</sup>た<sup>身</sup>と<sup>身</sup>な<sup>身</sup>つ<sup>身</sup>た。  
考<sup>身</sup>ハ、<sup>身</sup>あ<sup>身</sup>つ<sup>身</sup>た<sup>身</sup>譯<sup>身</sup>の<sup>身</sup>淵<sup>身</sup>源<sup>身</sup>と<sup>身</sup>な<sup>身</sup>つ<sup>身</sup>た<sup>身</sup>から、<sup>身</sup>切<sup>身</sup>削<sup>身</sup>して、<sup>身</sup>之<sup>身</sup>ハ<sup>身</sup>社<sup>身</sup>會<sup>身</sup>で、<sup>身</sup>  
あ<sup>身</sup>つ<sup>身</sup>た。殊<sup>身</sup>に、<sup>身</sup>め<sup>身</sup>る<sup>身</sup>回<sup>身</sup>り<sup>身</sup>合<sup>身</sup>せ<sup>身</sup>ば、<sup>身</sup>ハ<sup>身</sup>リ<sup>身</sup>ス<sup>身</sup>ハ<sup>身</sup>終<sup>身</sup>文<sup>身</sup>の<sup>身</sup>考<sup>身</sup>へ<sup>身</sup>ま<sup>身</sup>  
あ<sup>身</sup>つ<sup>身</sup>た。船<sup>身</sup>と<sup>身</sup>通<sup>身</sup>存<sup>身</sup>と<sup>身</sup>な<sup>身</sup>つ<sup>身</sup>た。○考<sup>身</sup>へ<sup>身</sup>て<sup>身</sup>未<sup>身</sup>だ<sup>身</sup>から、<sup>身</sup>考<sup>身</sup>へ<sup>身</sup>ま<sup>身</sup>  
て<sup>身</sup>あ<sup>身</sup>つ<sup>身</sup>た。さうして、<sup>身</sup>美<sup>身</sup>ま<sup>身</sup>ん、<sup>身</sup>深<sup>身</sup>海<sup>身</sup>氏<sup>身</sup>の<sup>身</sup>切<sup>身</sup>削<sup>身</sup>、<sup>身</sup>あ<sup>身</sup>つ<sup>身</sup>た<sup>身</sup>とい<sup>身</sup>  
ふ<sup>身</sup>考<sup>身</sup>へ<sup>身</sup>ま<sup>身</sup>、<sup>身</sup>い<sup>身</sup>ま<sup>身</sup>か<sup>身</sup>あ<sup>身</sup>つ<sup>身</sup>た。考<sup>身</sup>へ<sup>身</sup>と<sup>身</sup>曰<sup>身</sup>く<sup>身</sup>、<sup>身</sup>難<sup>身</sup>ぢ<sup>身</sup>  
考<sup>身</sup>へ<sup>身</sup>の<sup>身</sup>人<sup>身</sup>ハ、<sup>身</sup>ペ<sup>身</sup>ル<sup>身</sup>リ<sup>身</sup>の<sup>身</sup>船<sup>身</sup>と<sup>身</sup>載<sup>身</sup>せ<sup>身</sup>ん<sup>身</sup>て、<sup>身</sup>切<sup>身</sup>削<sup>身</sup>の<sup>身</sup>考<sup>身</sup>へ<sup>身</sup>ま<sup>身</sup>、<sup>身</sup>未<sup>身</sup>  
だ<sup>身</sup>とい<sup>身</sup>ふ。彼<sup>身</sup>等<sup>身</sup>ハ、<sup>身</sup>日<sup>身</sup>本<sup>身</sup>を<sup>身</sup>交<sup>身</sup>使<sup>身</sup>から、<sup>身</sup>百<sup>身</sup>文<sup>身</sup>を<sup>身</sup>目<sup>身</sup>の<sup>身</sup>考<sup>身</sup>へ<sup>身</sup>ま<sup>身</sup>  
とい<sup>身</sup>ふ。○考<sup>身</sup>へ<sup>身</sup>ま<sup>身</sup>、<sup>身</sup>隱<sup>身</sup>れ<sup>身</sup>て、<sup>身</sup>甲<sup>身</sup>州<sup>身</sup>上<sup>身</sup>と<sup>身</sup>な<sup>身</sup>つ<sup>身</sup>た。遂<sup>身</sup>に<sup>身</sup>支<sup>身</sup>那<sup>身</sup>  
と<sup>身</sup>通<sup>身</sup>ん<sup>身</sup>だ<sup>身</sup>や<sup>身</sup>う<sup>身</sup>な<sup>身</sup>仕<sup>身</sup>事<sup>身</sup>が<sup>身</sup>あ<sup>身</sup>つ<sup>身</sup>た。考<sup>身</sup>へ<sup>身</sup>の<sup>身</sup>日<sup>身</sup>本<sup>身</sup>を<sup>身</sup>考<sup>身</sup>へ<sup>身</sup>ま<sup>身</sup>、<sup>身</sup>此<sup>身</sup>の



雅船しから八年 日と云ふから二十一日歳の時であつた  
う。彼んハ米國に在る間 断髮し 米國の國籍に入る  
耶蘇教をせしむる事あつた。皆本國にゆつても與  
事さすしめんとの親しき米人の注意から出た  
措置であつた。彼は米國に在る或る人の  
愛する所を扱ふ道をもし 其元金に無つたうを  
流し 差支るハ丈の美修をせしめ ハリス一行を  
神法からん日本の上船 神法からんハリス 在る中  
つて 露艦の直士官殺傷する事あつた。彼んハ偏り  
通詞をやつて 珍重がらん。彼んハさうして 仕合  
あつて 米國に在る間 二回も大洗領に泊るゝ  
ハリスハ 日使として日本にゆつても 存行や 録する事  
あり

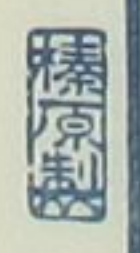


リスと共に 始終伊豆守の招へて 彼んが日本に  
つた時ハ 幕府の外交難儀時代の終り 權田守兼が  
赴いた。ハリスハ 勅使に 日本から 伊豆守を  
とて 派せしむる事あり。彼んハ 伊豆守を  
事件に 扱着した。十三歳の幼穉なるハ 供廿八年  
の終末を 経んハ 主派する事あり。其年 幕府  
のいふ事あり。其年 一書の書き添へる事あり。米  
船が 長崎を 砲撃し 船中を 焚く事あり。其の船中  
に あり。其の船中 船中 船中 船中 船中 船中  
ハ 船中 船中 船中 船中 船中 船中 船中 船中  
伊豆一巻 終る。其の附記と あり。其の附記と あり  
西南 あり。其の附記と あり。其の附記と あり



獄に投じんとし、幸ひ身命が初め、免れ、こととせり。彦  
は如何と面白く往愍、言ひあはせり。

彦の自叙傳の才二巻の生母、時事中の法判、英艦が  
薩摩に向つても、遂に英艦が焼打をやつたこと、長州  
の天子を捕へ、伊勢太廟に日鏡を安置せよとせり。折  
の中を滅せんとも、お針破ん、長州にけんを長兵衛  
をを絶せよとの言、長州が馬関を絶せ  
しと世を驚かせる事、長州が叙せらるるが彦一身  
を関する法も、興味を感するもの、木戸伊藤の二人  
が初め彦を捕へし時、故ら薩摩人をよみて、面  
会し、彦の着破らん、彦が叙せらるるが彦一身  
し、彦が叙せらるるが彦一身、京都



大坂の切迫をも、事柄を伝奏するが為め、英艦が  
伊藤、後成を乗せ、この時、折渡を托し、彦の  
を託し、終に伊藤、英艦と搭乗を得ること、伊藤  
と彦との其關係から、彦が叙せらるるが彦一身、伊藤が兵隊の役人  
たりし時、彦の病あり、如くして、折渡を托し、彦の  
御病つとせらるる、八年の河、今も、折渡を托し、彦の  
か、折渡の意、微の状を、彦の病あり、如くして、折渡を托し、彦の  
こと、法し、彦の病あり、如くして、折渡を托し、彦の  
彦の病あり、如くして、折渡を托し、彦の  
伴、彦の病あり、如くして、折渡を托し、彦の  
彦の病あり、如くして、折渡を托し、彦の  
彦の病あり、如くして、折渡を托し、彦の  
彦の病あり、如くして、折渡を托し、彦の



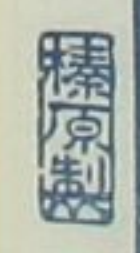
こと、幸に開成の爲に二三日の間、晴るの向ひること。此の訪りの時、佐野常氏、横井平四郎、今一、など、肥前侯の侍遇の女、なるも千原かつね、ことなど、が詳叙せんておておち、あ、香港の不安と、ミントを大改、移す、執事、彦が、韓旋し、其他、お四、との高、う、松、の、開成、の、こと、少、の、自、叙、の、大、隈、侯、の、遊、難、露、回、皇、子、遊、説、を、以、つ、て、華、を、絶、つ、も、ぬ、る、二、月、廿、三、日、終、彦、の、六、十、二、年、の、死、に、二、十、一、年、の、時、四、十、一、年、の、四、十、一、年、間、祖、四、の、生、活、し、た、譯、に、彼、の、日、本、の、表、卷、の、や、ち、あ、い、佐、竹、の、光、景、を、見、外、交、際、の、開、一、十、年、の、事、に、あ、り、た、少、さ、さ、い、の、地、り、と、彼、の、記、し、て、あ、つ、た、こと、の、開、成、史、の、志、料、と、あ、つ、た、こと、が、少、さ、さ、い、の、彼、の、故、事、の、(運、命、と、



進、つ、れ、よ、う、に、が、不、思、儀、の、仕、合、を、男、が、あ、つ、た、十、三、日、早、速、物、難、に、難、波、し、た、死、に、の、間、は、洋、中、五、十、日、も、深、か、七、外、四、船、に、救、ひ、上、げ、え、ん、に、役、に、な、け、り、年、少、が、被、擄、の、受、す、も、き、ち、あ、つ、た、を、特、別、に、陳、を、さ、ん、地、の、一、行、と、別、の、て、自、由、行、動、と、し、つ、た、或、る、時、は、ボ、ー、イ、と、あ、つ、た、若、役、に、服、し、或、る、時、は、市、豪、の、女、も、あ、つ、た、米、回、の、人、心、を、さ、ま、く、い、月、有、其、實、彼、ん、を、受、つ、た、教、育、し、た、よ、う、に、あ、つ、た、洋、切、し、く、く、又、を、あ、け、ん、女、實、無、情、の、元、故、と、し、に、某、元、身、既、池、宮、も、あ、つ、た、保、し、彼、ん、が、短、か、い、間、を、あ、つ、た、若、役、に、通、る、さ、せ、ん、に、こと、が、彼、ん、の、あ、つ、た、何、を、あ、つ、た、社、合、の、英、語、に、既、達、し、た、の、端、に、し、は、開、成、の、事、を、米、人、と、接、し、た、開、成、の、事、を、話、す、の、ツ、ン、く、進、ん、が、決、し、た、フ、ロ、ー、リ、ン、が、



まうらんと云はるゝ。考くてもと彼人のハケ斗米  
関くはるゝにも云くが他の洋の者と異つて  
苦音しとあるや、手殿をさすめ、其の意味の  
修業と云はるゝ。彼人の天祐と云ふ  
べきは彼人が日本の御國の秋の際會して、終文のハリ  
又使節の伴はるゝ。報しと云ふ。彼人のまが  
め身を定めて、外國に英團を遣はるゝ。果  
人が徳興のあつた時、内外人の尊重と云ふ。彼人  
の容貌を字と云ふ。五派の人、徳興や曾の深  
流と云ふ。受て、まが、其の家の生れ  
である。彼人が御國におもひ、其の故もある  
まうら。あゝ名利の、漢語の、報しと云ふ



をやり、義侠の子の、まが、彼人の人格の、  
故である。彼人の父母の御國、まが、  
九、石柵、團、まが、  
一面、洋の、  
ら、まが、  
衆の、  
身、  
が、  
彦、  
と、

アメリカ彦の自叙傳とて、上半の自叙傳  
ともいふ得る、下半は、彼人が、







お祖父とんふの旨を書いとお祖父とんふの旨、伯の書い書  
けぬとんふと三字をよへて共くぬれをも、とる人比男のこんこ  
と實物と子供とと奪つて子供を返かせぬお伯の怒つて  
其用をサシてと裂いて他二用を贈つて子供と共くと  
云ふ邊くまが書かぬてある。

○亡友山田真南(素心他)が獄中の詠詩を詩集にて云ひ  
しものを先記云ふ人比が、真南と繋獄の事、あるといひ  
かるいのがぬること、思つて、北原素心道と合つ  
北時、すへて見せぬ、の流二十年、保安條創と罹つれ  
ことがあつたと云へぬ、北原の、有罪と云ふこと、うれと云ふ  
も、今未決監中の持てあつて。

○田中素心らの隨筆、瀧口龍幸の親友、ソノクち



いてある。素心は豊かたつて家も多くの男子のあつてを  
念み三男をいふ不あ、とする、明境のあつて、然るに龍幸は  
三男であつた、ことごとく、龍幸と云ふ女の名を命じぬ、  
と云ふ。素人の知のから沈黙家で無愛嬌の処する、熱  
かろくうれを、二波元びことと上條と進んぬこととあ  
ことと云ふ、師中を初回、泉流院邊りの候、龍幸と云つれ  
時、龍幸は、龍幸、龍幸、龍幸、龍幸、龍幸、龍幸、龍幸、  
友も大い困つてと云ふ。いくつ龍幸の素心人の血を交  
けても懐んどのことと云ふ。是、龍幸の素心人の血を交  
つて心の中、物、龍幸、龍幸、龍幸、龍幸、龍幸、龍幸、  
龍幸、龍幸、龍幸、龍幸、龍幸、龍幸、龍幸、龍幸、  
あつた。素心、龍幸、龍幸、龍幸、龍幸、龍幸、龍幸、龍幸、  
素心、龍幸、龍幸、龍幸、龍幸、龍幸、龍幸、龍幸、



云んは。直る車を下り家へゆき、あすをついて見せん  
只今とすまむ。小兒の如く礼を以てある。又かゝ注文の生れ  
るる村の人七お前が大匠さうりぬから、是即一枚押書をも  
あついと云ふから忙しくもあつてやうぬがさうぬと云ふ  
七燈明さき柳幸の直る命をすべしとある。淡口はう  
イランつらむ。ハツ、リ屋である。此人がお物を云いぬらうと読むと  
云ふへき時かよんぬい言ふと云ふくじとある。

○同書大石山止の事もある。正に法助と云ふぬぬ。此人は流  
い次大の勇戦者だ。いつ七畑の傍ろを通つときまゝ竹杖を  
揮つて流石豆の葉をさすと云ふすがあつてあつ。雨天の日は  
ハ友達の後ろか、日さあつて見せんとビシヤク泥をひつか  
けたことぬ。淡口の是の義徳と略々大年業、ぬびいつ



七燈明書をすむと義徳が夏にけしとす。

○自合の六十以後毎年一冊つゝ隨筆を刊行することか  
まんと例とさうこの比が、丁卯の年、前年右ふの北城は後、  
頼まして隨筆二る回と連載しぬのゆゑんを最後と  
て出版と又合して今日さあつぬが、相書とす日、龍保  
隨筆いと古いと云ふ。是んが一年続んぬ十冊乃至十二冊  
に及んでゐる。進々自合も丸境と進んぬ、田敷の身とま  
るま、無聊と極くおぬ時と龍徳とさう、空を福を頼する  
ぬ心、敢て辞せずおぬにリしてゐると。是ん等ハスウラツ知  
ブウク、おぬりこぬ、おぬが、是んも進々積つて、  
七ある。皆ふ一時の感無むおぬ、つまらさぬ、  
ハあるが、是れをさうりおぬ、いやうさ、若かしく、一旦おぬ



隨筆刊行を亦思ひ立ち、此の二三年間自娛を録、自娛を七  
編までの題署の雑誌中から、刊行隨筆にぬのを可うも  
七のを昨日檢索し見ると、約七八冊の内、四十項を得れ  
尚ほ他の十数冊の隨筆を採つて四五十あるであら  
う。多し芽をスリうが、ブツリと取りつけ、あを合せて檢  
排するに優る一冊の隨筆が出来た。見當が付けられ、さう種  
別をぬめてあるのは全部書き直さなければならぬから、可う  
時間を要する。どうせじまがあるから二月位も三ヶ月も  
よいか、こゝに決りあつてあるのは、北城の精、揚載、池  
華の内から或るものを取り入れようか、どうしようかと  
ある。此のうちに執筆よりも其故を利用して二冊の印本の出来  
ておろか、この自分の為め、偉か、部数と印刷はよ



て受本して、少数の自分の友人に飲つたわけ、一般に流  
布して居るもの、田舎の雑誌に揚載した、七のい、あ、か  
可う取つて、さうもあつたから、或るもの、今方の隨筆に  
入り込んで、精全体と精進して自分の最後の隨筆として  
出版することを思ふ。或る春城の女から出たもの、一葉  
集である。

二月廿六日記

○昨日銀座街を散策すると、行者窓の口、蓮、空、花、の  
太鼓をおろす、さう、藤月も編と付いた、ステツクを、  
街のをえ、木綿の白衣を被つて、例、南無阿彌陀佛の  
の題目が背、雨、主、流、目、書、の、あ、り、書、の、七、保、を、脱、し、  
あ、り、白、の、脚、絆、を、つ、け、あ、り、木、綿、を、穿、つ、て、あ、り、  
秋、日、白、の、紋、列、二、重、の、あ、り、い、の、を、捲、あ、り、あ、り、い、い、



く目と惹かれ （おまのまのまの婦人い） 平格の （風来はあの比） 醜く （婦人） 婦人 （婦人） 上流婦人  
丸曲の東の友か千ヨトあ急力のきかおれが、  
此宗の熱心家いあふこと （い） 無 （い） 或る空すうれ  
日若くの一定の時間、市街を歩むと通いつておのひあ  
らうか、どんえ心持む居るが何人の回公乳があつて、あ  
らうか、そういかに自家同好む人知んず、此の （い） 業をや  
つてゐる間、無我が長るのかと思ふと、まゝ二風々んれ教果  
法れと思ふん。まん婦人入遇つていろく話を聴いた （い）  
面白くうとも思つた。  
○つんくの教果と二三の書肆を訪めて一二の回方を  
購ひ得た



○ 新田出ぬ千言本

武教全書

全書の摘録字本をうと終り一正千言  
とあり

○ 浮元権千言本

令義解業説

浮元権の書、初めを名くも五派あるも  
也、此氏此人自筆の論語業説二冊  
出づ、まゝと比較するに、同一業説いあ  
るから、原款い無んも、自言本とるこ  
と怪しむ、元権の漫抄（文章）三  
冊の著者ともいふ、文章の校



下七元怪自布子と云し此の字本の欄  
心日未禽を病とあり此者の内定は官  
位令職資令とあり木信宣の日記  
本云ること印記に據つて知る

○本間百里(共)及故四通

袴袴一通

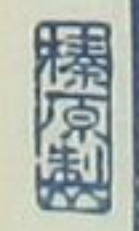
兔状の服矢から女の外に三ヶ条

曰 袴袴了了

曰 烏帽子布衣在所袴了了亦可有

妻用也とあり

本間百里の一人の親の妻あり有職の家と



一と隠るべき家物也往年此家より故之と聞  
す同本故百巻去り時事とことく購みし早  
稲の同方彼に納む今先執らして着る出  
づ没後想ふべし

袴袴一通

里袴八幅共一

文化六年九月十九日 杉岡清助辰方  
とあり此の杉岡辰方より言ひし袴号あり  
こととんまおとん辰方有名なる有職の  
家よりこの一通辰方の白袴とおあり

袴矢から女の外に三ヶ条の兔状のハ



右執心渡りし多存 宗令免許畢

文化八四月十九日 松尾清助 辰方花押

八幡五一願 卷

この辰方花押也

鶴庖丁講りい立回あり御厨子所預

任五位上行采女正五位左大臣狭守紀朝宗廿方 印ニ花押

文化十四年九月廿九日

本問並つ一版

烏帽子布衣差月許可状也宗廿方の出し

中つる文化十四年九月廿九日の日付る采女

正位宗廿方(花押)とあり其二表也



此等ハ免状の標本トシ之を要する多しト云ふ百里  
の傳の資料ニ充つことと得べし  
外ニ

○朝鮮拓本 四枚

有明朝鮮回方王子紀蹟碑

崇禎紀元元年 李鍾英撰 李南

執筆

文中清正と云り有る不有る有名の碑ニん

日本ハ稀觀のこもの也

○尚他ニ辛ノ帚ト署トス回報宮本を精の

これハ支那建築の宏闊間其他のスカレ彫意匠

を多く回ノ事ト云フ奪天工ニ見ル回多



し武々奪天工<sup>(通)</sup>字一<sup>レ</sup>字<sup>レ</sup>よかぬ何事も好字本  
を為本とすまはす  
二月五日記

○昨の散策に川上者二<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>世界漫遊記を得た  
明治三十四年大坂の金尾文淵堂發行の半紙活  
字本の巻首に七八枚の絵がある。今の珍くしい本と  
するに、こんを御見任せし後んじ見ると、今更さるる  
川上の大膽さを感じする。彼人の内地を行詰るに  
るる十三尺の小船に脱走を企て、支那の柳羅羅を  
大膽にどりつき、そこを一座のものと合流して、  
利しく海航し、其の総費は最初十九人であつたのが  
後々減り二人に止し、川上の親族の老よふ二人は立

泰西

米の如く又托し、残る十五人の肉を艱難を嘗めたり。  
當時亞米利加の或人と日本海僑を打ちあはす、  
るる。彼等ハ五日間絶食するの已むを得ない窮  
乏に陥りし事あり。四疊すの一家に徳島が獲たことを  
あはれしが、飲まず食わずの毎日の別はつけを多けれ  
り、或る時海流が激しく、船が波に打たれ、其の差  
押を喰ひ  
たり。一時は食の境遇に類する悲境に陥りし如  
きかぬ集の川上の事んも、其の好評を傳し、コレント  
ンの大英欽の夜分を捉え、四疊すへへから、亞米利  
加の劇に就ては、忘懐の事い批評をせよと云ふ、小村が  
使の通譯が、米回割の工口テツクのもの何物もする。登



坊人が多敷い通りを唱破して米田貴人の口威を  
一驚。英國の女優、チカスリ、の劇が、あつた。エロテラ  
の劇、お物成を、観た。其の、品、目、劇、名、サ、ア、オ、  
の、既、向、を、外、く、て、演、じ、た、の、外、は、ひとく、唱、来、を、愉、し、む、の、  
こと、も、あ、つ、た。え、ん、る、こ、と、を、又、奴、が、貴、族、人、の、名、を、  
今、も、推、せ、ん、た、り、し、た。判、頭、英、國、の、演、じ、た、英、國、の、社、  
会、を、得、た、の、は、後、百、皇、帝、を、さ、ら、ん、た、ウ、井、ル、ス、皇、太、子  
の、演、じ、た、と、あ、つ、た。バ、ツ、キ、ン、ガ、ム、の、宮、殿、を、百、さ、ん、を、こ、  
の、川、上、に、集、ま、り、し、た。日、本、式、舞、臺、を、お、心、を、え、ん、  
え、ん、出、演、す、る、の、時、を、得、た。二、千、年、を、物、つ、た、え、ん、か、ら、巴、  
里、く、七、年、の、時、を、得、た。日、本、の、物、つ、た。日、朝、後、の、川、  
上、の、演、じ、た、活、判、の、よ、う、な、人、身、攻、ま、を、し、た。彼、を、誰、

英和

ま、よ、の、ま、あ、つ、た、え、ん、の、娘、奴、か、ら、来、て、る、の、を、免、す、前、  
の、未、熟、む、七、世、界、を、演、じ、し、た。始、め、日、本、劇、を、枝、太、  
二、及、ん、だ、役、の、勝、氣、の、謙、と、社、と、せ、ぬ、は、る、え、ん、の、  
あ、つ、た。

△巴里、新しい時、悦ぶ、地、境、今、開、合、中、の、或、る、真、の、  
河、か、ら、買、ん、だ、て、演、じ、た、の、人、氣、を、得、た。遂、に、大、統、領、の、  
夜、今、招、え、ん、勤、業、を、得、た。斯、く、し、て、  
○日、明、和、八、年、前、野、村、田、祐、先、哲、が、小、塚、原、に、於、て、始、  
め、て、解、説、を、行、つ、た。日、を、紀、念、す、る、為、の、毎、年、法、  
先、哲、の、追、悼、會、を、開、いて、る、が、今、年、の、其、の、四、  
十、二、回、に、あ、つ、た。日、本、の、演、説、の、今、理、を、入、海、  
士、の、名、を、し、た。其、の、状、が、来、た。



第四十二回醫家先哲追薦會次第

一。日 時 三月四日午後三時開會

一。會 場 麴町區内山下町東洋ビルディング四階中山文化

研究所講堂

二。講 演

先哲追薦

富士川 游君

後藤良山先生

富士川 游君  
藤浪 剛一君

四。陳 列

(正午より三時まで随意展観)

(イ) 後藤良山及びその門下の遺墨遺著等

(ロ) 蘭方醫家の尺牘

五。宴 會 明治二十五年第一回醫家先哲祭より今日まで四十餘年連続して参同せる藤根常吉高比良義次郎富士川游三君を正賓として祝賀晩餐を開く。同日追薦會終了後東洋ビルディング地階レストランクッパに於て午後五時半より開催。會費金貳圓當日御持参のこぎ。

六。記念葉書 後藤良山先生傳及び遺墨を印刷せる記念葉書を参會者に贈呈す。

(一) 演 講	安田元次郎	(九) 演 講	藤浪 剛一
(二) 演 講	小野寺文蔵	(十) 演 講	藤浪 剛一
(三) 演 講	小野寺文蔵	(十一) 演 講	藤浪 剛一
(四) 演 講	大崎文蔵	(十二) 演 講	藤浪 剛一
(五) 演 講	大崎文蔵	(十三) 演 講	藤浪 剛一
(六) 演 講	大崎文蔵	(十四) 演 講	藤浪 剛一
(七) 演 講	大崎文蔵	(十五) 演 講	藤浪 剛一
(八) 演 講	大崎文蔵	(十六) 演 講	藤浪 剛一
(十七) 演 講	大崎文蔵	(十八) 演 講	藤浪 剛一
(十九) 演 講	大崎文蔵	(十九) 演 講	藤浪 剛一
(二十) 演 講	大崎文蔵	(二十) 演 講	藤浪 剛一

第四十二回醫家先哲追薦會出品

(一) 演 講	安田元次郎	(九) 演 講	藤浪 剛一
(二) 演 講	小野寺文蔵	(十) 演 講	藤浪 剛一
(三) 演 講	小野寺文蔵	(十一) 演 講	藤浪 剛一
(四) 演 講	大崎文蔵	(十二) 演 講	藤浪 剛一
(五) 演 講	大崎文蔵	(十三) 演 講	藤浪 剛一
(六) 演 講	大崎文蔵	(十四) 演 講	藤浪 剛一
(七) 演 講	大崎文蔵	(十五) 演 講	藤浪 剛一
(八) 演 講	大崎文蔵	(十六) 演 講	藤浪 剛一
(十九) 演 講	大崎文蔵	(十九) 演 講	藤浪 剛一
(二十) 演 講	大崎文蔵	(二十) 演 講	藤浪 剛一



第四十二回醫家先哲追薦會場陳列品

會場 麴町區内山下町東洋ビルヂング四階中山文化研究所講堂

(甲)尺牘

- (一)青木昆陽 (大槻玄澤宛) (南)
- (二)前野蘭化 (揖取深淵宛) (南)
- (三)同 (お峯宛) (太田)
- (四)杉田玄白 (大槻玄澤宛) (南)
- (五)同 (小石元俊宛) (富士川)
- (六)桂川甫周 (杉田玄白宛) (武藤)
- (七)同 (伊東宗益宛) (藤浪)
- (八)同 (三溪宛) (藤浪)
- (九)同 (大槻玄澤宛) (南)
- (一〇)同 (堀内易庵宛) (堀内)
- (一一)同 (桂川宗長宛) (富士川)
- (一二)宇田川玄隨 (大槻玄澤宛) (南)
- (一三)大槻玄澤 (佐々木中澤宛) (南)
- (一四)同 (蒔田喜兵衛宛) (南)
- (一五)同 (石山加風宛) (武藤)
- (一六)同 (堀内忠意宛) (堀内)
- (一七)同 (小石元俊宛) (富士川)
- (一八)江馬春齡 (堀内忠龍宛) (堀内)
- (一九)同 (武藤伊兵衛宛) (富士川)
- (二〇)宇田川玄真 (宇田川榕庵宛) (藤浪)
- (二一)同 (お世代宛) (藤浪)
- (二二)同 (小石元俊宛) (富士川)
- (二三)同 (佐々木中澤宛) (南)
- (二四)同 (小野寺丹元宛) (武藤)
- (二五)高野長英 (秋山義方宛) (秋山)
- (二六)同 (村上隨憲宛) (南)
- (二七)小關三英 (堀内忠龍宛) (堀内)
- (二八)同 (宛名を闕く) (富士川)
- (二九)同 (堀内忠亮宛) (堀内)
- (三〇)同 (山田大槻宛) (南)
- (三一)同 (五十嵐其徳宛) (南)
- (三二)桂川甫賢 (宛名を闕く) (南)
- (三三)杉田伯元 (太田南畝宛) (藤浪)
- (三四)坪井信道 (大久保黃齋宛) (武藤)
- (三五)同 (神岡玄俊宛) (南)
- (三六)同 (堀内忠龍宛) (堀内)
- (三七)同 (青地母宛) (富士川)
- (三八)同 (緒方洪庵宛) (緒方)
- (三九)大槻玄幹 (佐々木中澤宛) (南)
- (四〇)山村才助 (大槻玄澤宛) (南)
- (四一)足立長雋 (大槻玄澤宛) (南)
- (四二)同 (堀内忠亮宛) (堀内)
- (四三)同 (佐々木中澤宛) (南)
- (四四)佐々木中澤 (慧眼上人宛) (南)
- (四五)新宮涼庭 (宮永元丹宛) (富士川)
- (四六)宇田川榕庵 (宛名を闕く) (富士川)
- (四七)同 (佐々木中澤宛) (南)
- (四八)同 (堀内忠龍宛) (堀内)
- (四九)湊長安 (堀内忠龍宛) (堀内)
- (五〇)同 (五十嵐其徳宛) (南)
- (五一)同 (同) (富士川)
- (五二)同 (秋山義方宛) (秋山)
- (五三)小石元瑞 (服部右助宛) (南)
- (五四)同 (鳥崎元尙宛) (南)
- (五五)同 (篠崎小竹宛) (富士川)
- (五六)同 (小石元龍宛) (藤浪)
- (五七)同 (宇田川榕庵宛) (藤浪)

(乙)肖像

- (一七)杉田玄端 (小野寺丹元宛) (武藤)
- (一八)同 (林百郎宛) (南)
- (一九)同 (横山草玄宛) (富士川)
- (二〇)同 (門倉傳三郎宛) (富士川)
- (二一)松本順 (中島順信宛) (南)
- (二二)志築忠次郎 (大槻玄澤宛) (南)
- (二三)馬場佐十郎 (大槻玄澤宛) (南)
- (二四)品川梅村 (小野寺丹元宛) (武藤)
- (二五)中山作三郎 (小野寺玄適宛) (武藤)
- (二六)江馬權介 (安田元威宛) (藤浪)

奈良朝以前時代

(一)觀勒

奈良朝時代

(二)鑑真

平安朝時代

(三)出雲廣貞 (四)丹波康頼

(五)丹波雅忠

鎌倉時代

室町時代

(六)安藝守定 (七)馬嶋清眼院

(八)田代三喜

安土桃山時代

(九)曲直瀬道三 (一〇)甲斐徳木

(一一)御蘭意齋 (一二)施藥院全宗

(一三)施藥院宗伯

江戸時代前期

(一四)今大路玄朔 (一五)曲直瀬正琳

(一六)曲直瀬正純 (一七)岡本玄治

(一八)野間三竹 (一九)井上玄徹

江戸時代中期

後藤良山 吉益東洞

吉益南涯 香月牛山

瀨丘長珪 奥村良竹

惠美三白 畑黃山

淺井圖南

江戸時代後期

中神琴溪 宇津木昆臺

多紀元簡 多紀元堅

池田瑞沂 橘南蹊

緒方春朔 池田錦橋

伊澤蘭軒 原南陽

井上稚川 吉益北洲

和蘭流外科

和蘭醫方

吉雄耕牛 吉田自庵

和蘭醫方

前野蘭化 杉田玄白

宇田川玄隨 大槻玄澤

宇田川榛齋 橋本宗吉

江馬蘭齋 小石元俊

小石元瑞 海上隨鷗

小森桃塙 箕作阮甫

杉田成卿 黒川良安

川本幸民 廣瀬元恭

高野長英 新宮涼庭

以上

展觀 志アル方々ノ隨意參觀ヲ歡迎ス。但シ時

間ハ正午ヨリ五時マデニ限ル。

(一〇)織田貫齋 (堀内)

(一一)青木周海 (堀内)

(一二)青木周弼 (堀内)

(一三)青木周造 (堀内)



(一六) 同 (堀内忠意宛) (堀内)  
 (一七) 同 (小石元俊宛) (富士川)  
 (一八) 江馬春齡 (堀内忠龍宛) (堀内)  
 (一九) 同 (武藤伊兵衛宛) (富士川)  
 (二〇) 宇田川玄眞 (宇田川榕庵宛) (藤浪)  
 (二一) 同 (お世代宛) (藤浪)  
 (二二) 同 (小石元俊宛) (富士川)  
 (二三) 同 (佐々木中澤宛) (南)  
 (二四) 同 (小野寺丹元宛) (武藤)  
 (二五) 高野長英 (秋山義方宛) (秋山)  
 (二六) 同 (村上隨憲宛) (南)  
 (二七) 小關三英 (堀内忠龍宛) (堀内)  
 (二八) 同 (宛名を闕く) (富士川)  
 (二九) 同 (堀内忠亮宛) (堀内)  
 (三〇) 同 (山田大槻宛) (南)  
 (三一) 同 (五十嵐其徳宛) (南)  
 (三二) 桂川甫賢 (宛名を闕く) (南)  
 (三三) 杉田伯元 (太田南畝宛) (藤浪)  
 (三四) 坪井信道 (大久保黃齋宛) (武藤)  
 (三五) 同 (神岡玄俊宛) (南)  
 (三六) 同 (堀内忠龍宛) (堀内)  
 (三七) 同 (青地母宛) (富士川)  
 (三八) 同 (緒方洪庵宛) (緒方)  
 (三九) 大槻玄幹 (佐々木中澤宛) (南)  
 (四〇) 山村才助 (大槻玄澤宛) (南)  
 (四一) 足立長傷 (大槻玄澤宛) (南)  
 (四二) 同 (堀内忠亮宛) (堀内)  
 (四三) 同 (佐々木中澤宛) (南)  
 (四四) 佐々木中澤 (慧眼上人宛) (南)  
 (四五) 新宮涼庭 (宮永元丹宛) (富士川)  
 (四六) 宇田川榕庵 (宛名を闕く) (富士川)  
 (四七) 同 (佐々木中澤宛) (南)  
 (四八) 同 (堀内忠龍宛) (堀内)  
 (四九) 湊長安 (堀内忠龍宛) (堀内)  
 (五〇) 同 (五十嵐其徳宛) (南)  
 (五一) 同 (同) (富士川)  
 (五二) 同 (秋山義方宛) (秋山)  
 (五三) 小石元瑞 (服部右助宛) (南)  
 (五四) 同 (島崎元尙宛) (南)  
 (五五) 同 (篠崎小竹宛) (富士川)  
 (五六) 同 (小石元龍宛) (藤浪)  
 (五七) 同 (宇田川榕庵宛) (藤浪)  
 (五八) 同 (島崎元丹宛) (富士川)  
 (五九) 廣瀬元恭 (大久保黃齋宛) (武藤)  
 (六〇) 土生玄昌 (雲壽宛) (富士川)  
 (六一) 木間暁軒 (本橋宛) (富士川)  
 (六二) 日高涼臺 (吉村文哲宛) (富士川)  
 (六三) 飯沼愨齋 (秋吉雲桂宛) (富士川)  
 (六四) 内藤泰岳 (大久保黃齋宛) (武藤)  
 (六五) 黒川良庵 (堀内忠龍宛) (堀内)  
 (六六) 佐久間象山 (村上誠之丞宛) (宮木)  
 (六七) 同 (堀内忠亮宛) (堀内)  
 (六八) 緒方洪庵 (緒方洪哉宛) (緒方)  
 (六九) 同 (菊池秋坪宛) (菊池)  
 (七〇) 同 (武谷掠亭宛) (南)  
 (七一) 同 (雲平宛) (南)  
 (七二) 同 (布野其平宛) (武藤)  
 (七三) 同 (藤井高雅宛) (富士川)  
 (七四) 同 (堀内忠龍宛) (堀内)  
 (七五) 箕作阮甫 (菊池秋坪宛) (菊池)  
 (七六) 同 (堀内忠亮宛) (堀内)  
 (七七) 伊東玄朴 (鈴木玄岱宛) (武藤)  
 (七八) 同 (宛名を闕く) (南)  
 (七九) 同 (八雲屋雲八宛) (南)  
 (八〇) 同 (堀内忠亮宛) (堀内)  
 (八一) 同 (小石元瑞宛) (富士川)  
 (八二) 同 (秋山佐藏宛) (秋山)  
 (八三) 佐藤泰然 (秋山佐藏宛) (秋山)  
 (八四) 同 (佐藤舜海宛) (富士川)  
 (八五) 大槻俊齋 (大槻平次宛) (南)  
 (八六) 同 (宛名を闕く) (富士川)  
 (八七) 同 (堀内忠亮宛) (堀内)  
 (八八) 同 (榮仙宛) (富士川)  
 (八九) 同 (堀内忠亮宛) (堀内)  
 (九〇) 戸塚靜海 (戸塚柳齋宛) (富士川)  
 (九一) 同 (堀内忠亮宛) (堀内)  
 (九二) 箕作秋坪 (武谷掠亭宛) (南)  
 (九三) 村上英俊 (同藩士宛) (南)  
 (九四) 栗崎道三 (小野寺丹元宛) (武藤)  
 (九五) 吉雄常三 (小野寺丹元宛) (武藤)  
 (九六) 吉雄俊藏 (佐々木中澤宛) (南)

(三) 出雲廣貞 (四) 丹波康頼  
 (五) 丹波雅忠  
 鎌倉時代  
 室町時代  
 (六) 安藝守定 (七) 馬嶋清眼院  
 (八) 田代三喜  
 安土桃山時代  
 (九) 曲直瀬道三 (一〇) 甲斐徳木  
 (一一) 御蘭意齋 (一二) 施藥院全宗  
 江戸時代前期  
 (一三) 施藥院宗伯  
 江戸時代中期  
 (一四) 今大路玄朔 (一五) 曲直瀬正琳  
 (一六) 曲直瀬正純 (一七) 岡本玄治  
 (一八) 野間三竹 (一九) 井上玄徹  
 江戸時代後期  
 中神琴溪 宇津木昆臺  
 多紀元簡 多紀元堅  
 多紀柳沂 橘南蹊  
 池田瑞仙 池田錦橋  
 緒方春朔 原南陽  
 伊澤蘭軒 吉益北洲  
 井上稚川  
 和蘭流外科  
 檜林鎮山 檜林榮休  
 檜林宗建 吉田自庵  
 吉雄耕牛  
 和蘭醫方  
 前野蘭化 杉田玄白  
 宇田川玄隨 大槻玄澤  
 宇田川椿齋 橋本宗吉  
 江馬蘭齋 小石元俊  
 小石元瑞 海上隨鷗  
 小森桃塢 箕作阮甫  
 杉田成卿 黒川良安  
 川本幸民 廣瀬元恭  
 高野長英 新宮涼庭  
 緒方洪庵 伊東玄朴  
 竹内玄洞 戸塚靜海  
 佐藤泰然 土生玄碩  
 高良齋 堀内素堂  
 宇田川榕庵 河津省庵  
 桑田立齋 大槻俊齋  
 箕作紫川 齋藤方策  
 原老柳 青木研藏  
 漢蘭折衷派  
 山脇東洋 山脇東門  
 華岡青洲 本間棗軒  
 産科  
 賀川玄悅 賀川玄廸  
 片倉鶴陵 奥劣齋  
 水原三折  
 本草科  
 貝原益軒 向井元升  
 稻生若水 松岡恕庵  
 野呂元丈 小野蘭山  
 飯沼愨齋  
 (丙) 後藤良山及其門下一派遺著遺墨類  
 (一) 病因考(後藤良山)  
 (二) 師說筆說(良山門人加藤暢庵)  
 (三) 祝壽編(良山門人香川修庵)  
 (四) 良山文集  
 (五) 良山先生雜話  
 (六) 艾灸通說(後藤椿庵)  
 (七) 傷風約言(後藤椿庵)  
 (八) 椿庵遺稿(帳中遺稿)  
 (九) 養壽院醫則(山脇東洋)  
 (一〇) 藏志(山脇東洋)  
 (一一) 外臺祕要方(山脇東洋梓行)  
 (一二) 東門隨筆(山脇東門)  
 (一三) 一本堂行餘醫言(香川修庵)  
 (一四) 葵選(香川修庵)  
 (一五) 一本堂醫話(中西元周)  
 (一六) 家藏喜事  
 (一七) 救弊醫話(赤澤貞幹)



(五〇)同	(五十嵐其徳宛)	(南)	宇田川玄隨	大槻玄澤
(五一)同	(同)	(富士川)	宇田川榛齋	橋本宗吉
(五二)同	(秋山義方宛)	(秋山)	江馬蘭齋	小石元俊
(五三)小	(服部右助宛)	(南)	小石元瑞	海上隨鷗
(五四)同	(島崎元尙宛)	(南)	小森桃塙	箕作阮甫
(五五)同	(篠崎小竹宛)	(富士川)	杉田成卿	黒川良安
(五六)同	(小石元龍宛)	(藤浪)	川本幸民	廣瀬元恭
(五七)同	(宇田川榕庵宛)	(藤浪)	高野長英	新宮涼庭
(五八)同	(島崎元丹宛)	(富士川)	緒方洪庵	伊東玄朴
(五九)廣	(大久保黃齋宛)	(武藤)	竹内玄洞	戸塚靜海
(六〇)土	(雲壽宛)	(富士川)	佐藤泰然	土生玄碩
(六一)木	(木橋宛)	(富士川)	高良齋	堀内素堂
(六二)日	(吉村文哲宛)	(富士川)	宇田川榕庵	河津省庵
(六三)飯	(秋吉雲桂宛)	(富士川)	桑田立齋	大槻俊齋
(六四)内	(天久保黃齋宛)	(武藤)	箕作紫川	齊藤方策
(六五)黒	(堀内忠龍宛)	(堀内)	原老柳	青木研藏
(六六)佐	(村上誠之丞宛)	(宮木)	漢蘭折衷派	
(六七)同	(堀内忠亮宛)	(堀内)	山脇東洋	山脇東門
(六八)緒	(緒方洪哉宛)	(緒方)	華岡青洲	木間棗軒
(六九)同	(菊池秋坪宛)	(菊池)	産科	
(七〇)同	(武谷涼亭宛)	(南)	賀川玄悅	賀川玄迪
(七一)同	(雲平宛)	(南)	片倉鶴陵	奥劣齋
(七二)同	(布野其平宛)	(武藤)	水原三折	
(七三)同	(藤井高雅宛)	(富士川)	本草科	
(七四)同	(堀内忠龍宛)	(堀内)	貝原益軒	向井元升
(七五)箕	(菊池秋坪宛)	(菊池)	稻生若水	松岡恕庵
(七六)同	(堀内忠亮宛)	(堀内)	飯沼慾齋	小野蘭山
(七七)伊	(鈴木玄岱宛)	(武藤)		
(七八)同	(宛名を闕く)	(南)		
(七九)同	(八雲屋雲八宛)	(南)		
(八〇)同	(堀内忠亮宛)	(堀内)		
(八一)同	(小石元瑞宛)	(富士川)		
(八二)同	(秋山佐藏宛)	(秋山)		
(八三)佐	(秋山佐藏宛)	(秋山)		
(八四)同	(佐藤舜海宛)	(富士川)		
(八五)大	(大槻平次宛)	(南)		
(八六)同	(宛名を闕く)	(富士川)		
(八七)同	(堀内忠亮宛)	(堀内)		
(八八)川	(榮仙宛)	(富士川)		
(八九)同	(堀内忠亮宛)	(堀内)		
(九〇)戸	(戸塚柳齋宛)	(富士川)		
(九一)同	(堀内忠亮宛)	(堀内)		
(九二)箕	(武谷涼亭宛)	(南)		
(九三)村	(同藩士宛)	(宮木)		
(九四)栗	(小野寺丹元宛)	(武藤)		
(九五)吉	(小野寺丹元宛)	(武藤)		
(九六)吉	(佐々木中澤宛)	(南)		
(九七)堀	(小池忠伯宛)	(武藤)		
(九八)足	(父榮建死亡通知)	(武藤)		
(九九)手	(小野寺丹元宛)	(武藤)		
(一〇〇)高	(同前宛)	(武藤)		
(一〇一)赤	(同前宛)	(武藤)		
(一〇二)杉	(堀内忠龍宛)	(堀内)		
(一〇三)竹	(同前)	(堀内)		
(一〇四)織	(同前)	(堀内)		
(一〇五)織	(同前)	(堀内)		
(一〇六)林	(同前)	(堀内)		
(一〇七)青	(同前)	(堀内)		
(一〇八)青	(同前)	(堀内)		
(一〇九)桑	(同前)	(堀内)		
(一一〇)三	(同前)	(堀内)		
(一一一)鈴	(同前)	(堀内)		
(一一二)箕	(同前)	(堀内)		
(一一三)伊	(西山玄道宛)	(南)		
(一一四)同	(柴田承桂宛)	(富士川)		
(一一五)石	(櫻坡宛)	(富士川)		
(一一六)島	(横山忍宛)	(富士川)		

昭和八年三月四日

日本醫史學會

- (一) 病因考(後藤良山)
- (二) 節說筆說(良山門人加藤暢庵)
- (三) 祝壽編(良山門人香川修庵)
- (四) 良山文集
- (五) 良山先生雜話
- (六) 艾灸通說(後藤椿庵)
- (七) 傷風約言(後藤椿庵)
- (八) 椿庵遺稿(帳中遺稿)
- (九) 養壽院醫則(山脇東洋)
- (一〇) 藏志(山脇東洋)
- (一一) 外臺秘要方(山脇東洋梓行)
- (一二) 東門隨筆(山脇東門)
- (一三) 一本堂行餘醫言(香川修庵)
- (一四) 藥選(香川修庵)
- (一五) 一本堂醫話(中西元周)
- (一六) 家藏喜事
- (一七) 救弊醫話(赤澤貞幹)
- (一八) 杏林內省錄(緒方惟勝)
- (一九) 醫事傍觀(三宅石庵)
- (二〇) 醫事小言(原南陽)
- (二一) 砦草
- (二二) 叢記(南陽手稿)
- (二三) 瘦狗傷考
- (二四) 後藤良山遺墨(詩)
- (二五) 山脇東洋、香川修庵遺墨、其他

以上  
 尺牘所藏者諸氏ノ姓氏ヲ略記シタレドモ、ココニ再録シテ各位ニ對シテ厚意ヲ謝ス  
 志アル方々ノ隨意參觀ヲ歡迎ス。但シ時  
 間ハ正午ヨリ五時マデニ限ル。

- (南) 南 大 曹氏 (大田) 太田 正 隆氏
- (武藤) 武藤 一 郎氏 (堀内) 堀内 亮 一氏
- (秋山) 秋山 練 造氏 (緒方) 緒方 富 雄氏
- (宮本) 宮本 仲氏 (菊池) 菊池 池氏
- (藤浪) 藤浪 剛一氏 (富士川) 富士川 游氏



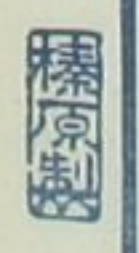
○京都帝國大學圖書部、古澤武敏、山鹿元鈴、  
鹿三七等が、近年痛著に、其の日本古刊書目と  
字の整理してきた。この約四百五十頁、その中の書物  
が、大正良朝と、平賀利経の代筆所時代の四期  
に分ち、文祿の末年と、古刊書の、今を、切らるる  
その、経緯と、各書、の、荷、あ、七、注、と、る、る、刊、記  
の、あ、る、の、刊、年、の、勿、論、是、後、七、記、と、る、の、刊、記、と、る  
一、七、年、代、の、の、確、と、い、難、い、と、る、の、各、時、代、の、分、載  
一、括、と、五、十、類、別、に、排、列、し、先、人、の、登、録、し、て、考、察、  
ある、因、昔、に、現、在、所、在、の、あ、る、難、い、と、る、あ、る、と、る、  
の、七、枚、り、と、る、。亦、文、献、年、表、と、書、目、年、表、の、  
書、添、く、あ、る、。古、文、書、中、の、因、昔、に、関、係、ある、部、分、を、何



録し、その四期合の録載し、を、約、し、て、文、献、年、表、を  
細、心、し、て、一、七、年、書、目、の、確、定、漸、や、と、成、え、る、と、考、  
目、録、に、出、版、と、い、は、る、と、考、へ、る、。三月二日  
○平凡社、の、出版、係、の、世界、探、奇、全、集、の、内、の、女、の、迷、宮  
と、題、し、て、一、巻、の、あ、る、。この、埃、及、四、王、の、後、宮、の、事、を  
考、へ、た、と、い、は、る、。著、者、は、副、王、ア、ム、ン、ス、ピ、ル、の、二、世、の、妃、  
ピ、タ、ン、の、華、と、い、は、る、の、比、と、い、は、る、。此、夫、人、の、歌、  
が、毎、論、マ、ホ、メ、ツ、ト、教、を、信、じ、後、宮、の、事、を、通、曉、し、  
ぬ、と、い、は、る、。相、南、文、才、の、あ、る、女、也、。埃、及、ハ、マ、ホ、メ、  
夫、人、の、一、巻、の、あ、る、の、四、が、あ、る、。多、く、奴、隷、の、あ、る、か、ら、  
後、宮、の、事、を、知、る、の、一、無、也、と、い、は、る、。奴、隷、の、  
王、者、の、所、有、の、屋、を、し、て、其、の、所、有、者、ハ、此、奴、隷、の、前



無上の権力を有せしめてゐる。何十人せかめてもさういふ毒があ  
る。毒をえとくく女ばかり、毒性の強いものもある。幼弱な  
母の手を離れればもうさういふ教育を受けるものもあ  
る。教がある。志が強い女の群のあつて國王の寵を得て正妻  
となすものもある。子を産むことが何年かして七女に権力を  
す。所以に、女子の正妻となすものとさういふから、彼等は一  
王の寵を得て母とさういふのが畢生の渴望で、他なる何物も  
ない。勿論女同士の間にも嫉妬がある。正妻の無上権を有  
してゐるから、正妻の嫉妬を受けると、後継さういふこと  
勿論だ。後宮のりこと一切秘蔵してあるものも、さういふ外部  
に知らせることも、後宮内のことにはいへない。後宮  
の男子の出入りすることを許さないと、志が強い正妻はけ  
り



許さぬしめて、こんないろいろ役をつとめる。國王が正妻を降  
つて言ひあがることがあると、正妻が代つて言ひあがれば  
男の職務がある。七女と國王の外の女の色香を愛して  
て、内証に別館に納めるといふ、正妻とさういふことが  
ある。これが後宮の最も恐慌を生ずることだ。全然運路が  
さういふから、正妻と毒も大いなるものがある。折々如  
く奴隷以外の別種の女を納めようといふことだ。ホメット教の禁  
ずる所からあるが、正妻が納めようといふもの、自分の母性  
を極まりしめて、女子の興味は薄く他所の花を受けつゝ、人  
柄があるから、こんなが性で行はれる。勿論激烈の嫉妬憤怒が  
妻の側を起つて女子は、七女の子を虐待しとせう。瀬  
白い情を渡すことだ。帯比とさういふ。奴隷境遇のさういふ母の



為愛を受けに任給かまのりむ、子に對して母愛が缺けし  
かこと若者も「解」せぬ。此の女奴隷一國の後書をハレム  
と云へるが、其の状見ると、突然其の徳川氏の大奥や諸  
侯の後宮を想ひ起さしめるものがある。奴隷を焼く  
よめかゝ見ると、ハレム世性の自棄の心があるか、想像さ  
す、けいれんも、皆が同じ境遇であるか、あまのまさん  
氣もさく、古くは王の寵眷を討てた一匹狼や、彼等  
の重んずる格力のかゝる。若者も、奴隷の人助けに、女奴隷  
と遇す、優し、其言も、利して禮をさす、ことある  
が、斯き、寧ろ彼等の輕侮を憐れむ所以と云へる  
も、兎角、ホソツト救ふ、奴隷は、左も、卑下せん  
る、居る、教祖の教を、撫す、好く、其教を、貴い、よめ世



界、まゝと考へるから、流して女奴隷の感情は、能く  
相違する、と、違つてゐる。徳川四王の子は、外、四、色、を  
とす、その、か、あつても、文、心、古の教が、身、ま、ま、ぬ、と、その  
又、洋、の、教祖の教を、至上と、跪、ま、信、じて、ゐる、から、その  
入、異、る、説、の、邪、と、取、り、て、為、め、外、回、り、た、之、の、七、神、説  
王、齋、さ、ぬ、と、云、ひ、ん、と、あ、る。徳、川、の、習、俗、が、少、く、権、威、が、あ  
る、が、ん、と、ゐる、から、一、例、と、し、て、若、者、の、生、涯、に、當、つ、て、免、く、ぬ、終、り  
き、と、云、へ、る、一、事、が、あ、る。ま、い、あ、る、婦、院、の、席、に、お、え  
れ、際、に、或、る、者、婦、人、も、完、然、と、其、身、は、か、う、の、女、を、控、え  
る、こと、と、し、事、實、を、考、へ、て、ゐ、る、若、者、の、子、が、無、つ、れ、の、い、ひ、思、ひ  
り、の、を、考、へ、て、見、え、れ、ば、自、己、の、産、人、比、子、を、さ、い、の、ま、い、真、實  
か、し、め、る、俗、に、其、子、が、病、を、休、ん、ぬ、實、母、を、考、へ、る、と、あ、つ、た、り



のを核人より選りしとあるが、似く無残心の子を溺つたゆ  
ふい若者が推勢ある割王のまゝあるかゝることもある。

標原製

津町の在り、その才が強く流流は千四百七十九、非住宅二千四百七十九棟流失、死者二萬千九百五十七人を出した。その時は地震後五十分後に海嘯があつたか、今度もあれば一時間位の間は海嘯がありはせぬかと心配される。海嘯の来る時は海の浪がくつと高くなつて来るから注意が必要だ。

## 宮城縣下は五尺の怒濤

【仙台發】宮城縣下の海嘯につきその後の支局に入つた情報は左の通りである△牡鹿郡女川港は地震の後廿分ばかり過ぎて第一回、續いて四回海嘯襲來し、いづれも約五尺の怒濤であつた浸水家屋二、三百戸に達し家具の流失夥しく波にさらはれた人はないらしいが海水を浴びてぬれ鼠になつた人は非常に多い△鮎川濱は海岸に材木その他家具類が押し流されて凄慘を呈してゐる

【石巻發】三日午前二時半頃大地震と共に宮城縣牡鹿半島一帯に萬雷の落下するかと思はれる音をたてて海嘯襲來し女川港郵便局前は四尺、鮎川港は五、六尺の浸水に達した。石巻地方にも海嘯襲來の恐れがあるので電燈線切斷による暗黒の中に警鐘は剛打され凄愴の氣分が漲つてをり海岸住民はいづれも避難準備で人心競々としてゐる  
【三日午前五時鐵道省著電】宮城縣石巻の北一里渡波町は三百戸浸水したが漸次減水しつゝあり、蠶業試験場は無事、盛岡方面は被害なし

大谷每岸<sup>(宮)</sup>では數名行方不明 【仙台發】宮城縣下に三日午前二時卅分ごろ夢を破つて猛烈な

## 岩手縣下の被害莫大







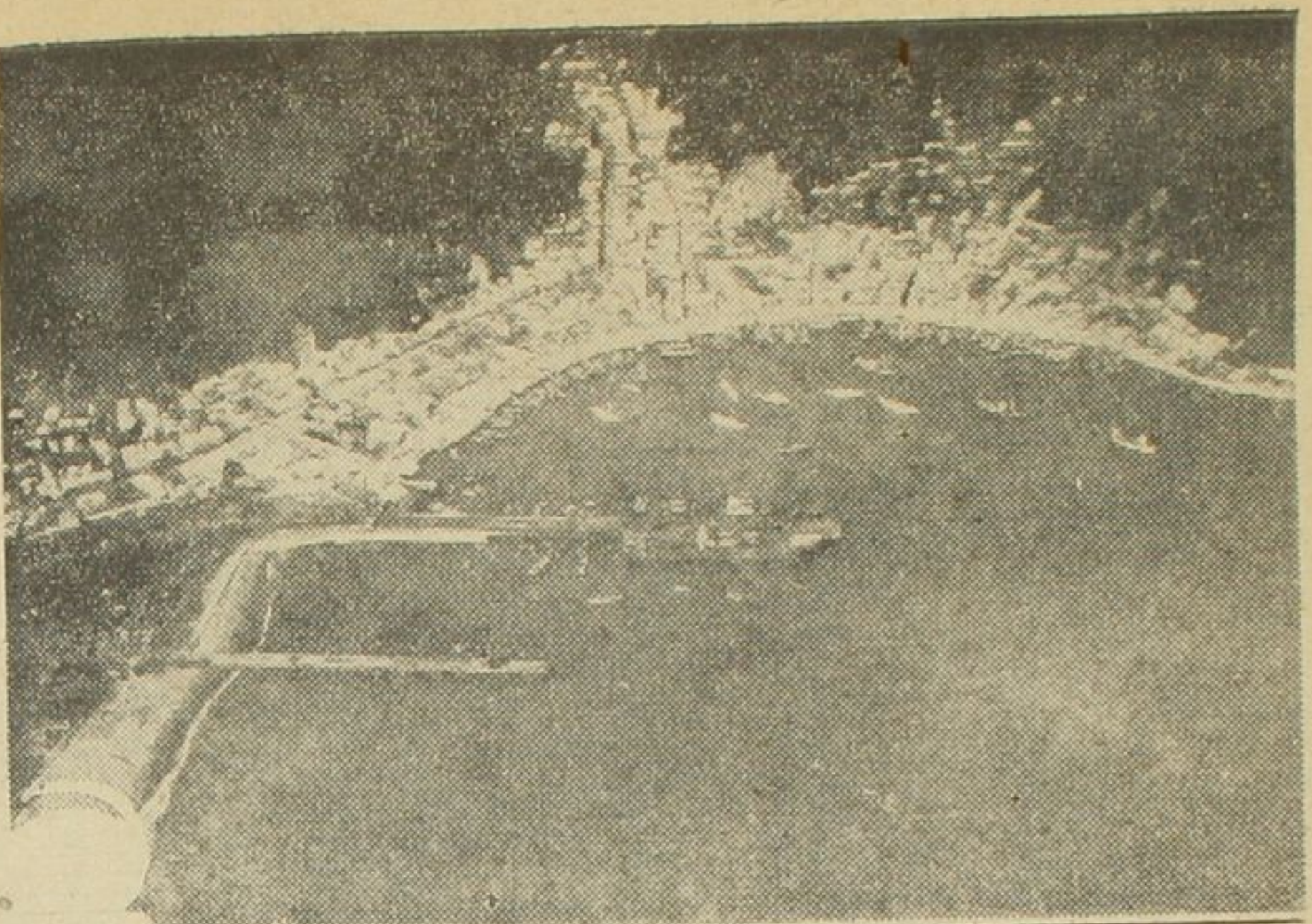




のを核人より選りしとあるが、行く無残化の子を待つ所の  
 美しい若者が権柄がある新王のあむあるか、このことである。

# 無人の釜石の谷に二日く

核を大破した(釜石は釜石)



## 各地の模様

### 廿年ぶりの強震

#### 秋田

【秋田發】三日午前二時卅二分秋田地方に近年に例のない強震あり時計の振子が止まり商店などの物の物はガラ／＼落ちるといふ騒ぎで連えるような風邪の騒ぎに市民は飛び出して、極度の恐怖に襲はれたが約一分間で静かになった。

#### 仙台

【仙台發】仙台測候所では地震につき次の如く發表した。

#### 岩手

【盛岡發】岩手縣下を襲った地震は發震三日午前二時

#### 福島

【福島發】三日午前二時卅二分福島地方に大地震あり福島測候所の調査によれば初期震動時間廿秒七、総震動時間一時間、震幅は地震計が外れて測定不能、震度強、性質急で震源地は福島市の東北東百六十キロ、金山山東方沖合と測測されるが福島地方として未曾有の強震にて明治廿一年の磐梯山の噴火および廿六、七年吾妻山噴火の際よりも強震である。

#### 千葉

【千葉發】三日午前二時卅二分房総半島一帯に近來希な

### 測候所の地震計飛ぶ

【甲府發】甲府盆地一帯には三日午前三時卅三分頃から約三分間水平動の強震あり、時計の振子が止まり物のものは落ちた、甲府測候所の地震計の針ははね飛んで測定不能となった。

### 出動準備

【盛岡發】岩手縣警務部では中野警務課長、藤原保安課長など警察にかけつけ各地の状況を調査して内務省に報告し盛岡警員の出動準備を行ひ出動準備を整へてゐる。



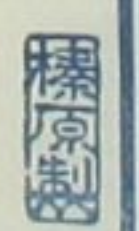









大抵である。幸い北馬に棲む美鷹は形貌と音とく  
人よりかくいふ鳥とあるから、多くの人が喜ぶ。いろく  
の種数を集めて観察し、互ひに其美と教ふ合ふま  
い早く四況初年、陸軍に行き、其の書付るふも今存  
の。近來に方々鳩の採集があらはれ、陸海軍にも其を  
奨励してゐるが、現在係書鳩の数は陸軍に約一萬  
二千羽、海軍に一千羽、民間三十九団体、約二萬羽  
に過ぎない。此の約千七百羽を採集する術は約一  
千羽を飼養し、そのうちを多くが、七つとく其の数を  
殖せぬといふ。



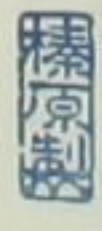
幸い鳩が専ら軍用であるといふは、今用は供する鳩も  
いろいろの種数があり、観察し供するものとする。やまは主  
に、あまのあつちやまの、頭の下からやうなの七ある。若くは  
の早いのがあるから、いんを採る種房が七ある。南は若  
鷹と圓い、あまを多くする。鳩は二種、國民軍とも  
あまを多く採る。佛島西に多く採る。種数を観察する  
つて、私有の鳩は登録を要して居る。有るものは、傷  
の跡があること、いふも、あまの。鳩は風味と七、七  
るもの、先づ観察を弄から入らう。あまの、支那の、或  
の、鳥の、笛を装つて、鳩を飛して、其の中、の、チ  
ルケストラを演奏して、其の習慣がある。この、鳥の、初  
傳書、鳩が、鷹に、犯さう、のを、防く、為め、 笛を装



單一の比と云ふが今の娛樂のよと云ふれ。こんなこ  
とを何んがよのから、心を愛し鳩の飼養や、隣ん  
こやうさるんが、傳書坊の訓練も子おのつかう手  
か出さうさるから、心乾糸糸の風の起つことを  
歌する。偶々本真若草の坊の一書を編み直し不  
感と記すと云ふ

三月五日。

○現下熱河出征の兵士の氷雪の艱苦を冒しを志きりん  
就ゆをぬめりてあつ、彼等が皆を寒國へ生んれりあ  
即ち前日大雪と海嘯、動もん或千の生金と家  
屋財産を失ひたり。三陸がより出費地りり、此の俵  
福の雅うたもよめ内、い出征兵士の血も七差し少  
からせりへし、哀んや彼等が未だ日此處をわたり



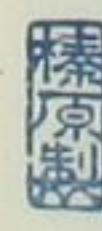
一心曹のゆえに我いつてあつ、此處を彼等がわたり  
あつ、い志を我、世表を末すの、哀んあつ、特筆差し  
あり終りありといラ、日本の報する也

○日本の混下にある支那の関東物、満洲と地境を  
接し、其の境界、石の羅列あり、然るに其境界石  
漸次移動して満洲地區に入ると云ふ、えん何ん  
故に取て北國邊陲地を盗取故にあつ、滿洲地  
の満洲國或後、えんをどうせ、何故んを為  
すか、支那東海、道路ひらけ、繁榮と、い、夜間割  
盗、過、あ、こ、さ、さ、い、い、繁、土、さ、う、漢、境、の、よ、の、之  
れを盗取やあ、彼等、満洲、い、さ、う、迫、害、に、過、ひ、又  
盜難に罹り、さ、し、も、心、を、奪、ん、さ、う、結、り、あ、こ、さ、う、在、り、彼



昔ハ人知れず境界の石を遠く移し吾為時より侵  
略今令くハ即ち云く吾人の國東州に属す又よ此の  
境界侵をもとんハ依りて侵略を免かるとん陸軍  
大佐谷穀那華雄もよと誅談す

○我邦の小供の喧嘩を見らる路きよ弱き者を  
斃せんと見らる路き強き追ひ窮すことをあき  
す性即ち弱者を憫んあしものあり或ハ弱き強きを  
追窮し打ちのめすやうなことがあんに環視のハ  
供ハ兄弟姉妹を誦傳をすも神傳に應せきんハ皆ハ弱  
者共し強者又向ふんハ戦戦ハ弱き者の為  
す所也亦我國民性の一端を、支那の七供の喧嘩ハどう  
かとよと強者弱者を斃して弱死セハ手を緩めず查



りかつて撲つ●敵く是を侮籍あるあり、環視のハ  
兒の弱者の為ハ使氣を省すよ無く強者ハ堂  
すハ常きよんハ亦反りて於ける國民性の一現ハん  
と日本と同一からること也斯し

二月國遊會例會 (妻恋坂國遊堂俱樂部)

『先妻がかたみは残す針の宛』  
光雲翁はカラ々々と笑はれた  
く針を刺したものをいふも老翁  
に白牡丹は、おれもいふなりよ  
代儀かに己むを得ぬ欠席から  
の宛は、先雲翁に昔の懐古編  
藤田翁から先雲翁に昔の懐古  
同いから根附師の昔と昔の  
室実△懐古△室実△周山△  
活和同津幸言(ハ研師)が敢て



一玩具の刀の塚日高物から統い、水石屋のサジで成切した  
 治の又先祖の御石知りせし成田山の身は百り布れ鞠  
 錫のあれから先へつたへてと先云海が清水は知れり  
 才く紐下肩うう紐は心はく解いた覺へかありや中  
 春は原幹事か解しからよまよと  
 河聖幹事か解しからよまよと  
 右の名は、解しからよまよと  
 左の國次茶五郎の解しからよまよと  
 真とふ人は、解しからよまよと  
 いづゝ居りたか彼人は且形心か、人か解しからよまよと  
 信物織いも一取まを勢を連れ、上野の松源へ解しからよまよと  
 函料が百圓も入ると、水引の懸る信物弟子に松源へ持たし、遣り  
 弟子が帰えりて、解しからよまよと、何にせたりませんと云

へば、まだあらかと云つて居らんか、……、彼の住んで  
 居た脇の石屋の親節に至つて、記切者で、元まは、母解しからよまよ  
 ずら、何か出来まゝした、解しからよまよと、江戸子に、解しからよまよと、  
 ずら、何かしう描いて、此の書は有り難ふと、わつたものが、解しからよまよと



かつて、單荷の抽斗、一杯、真の石屋が、解しからよまよと、  
 のし、高き、解しからよまよと、又、解しからよまよと、  
 真とふ人も、解しからよまよと、  
 海の話は、解しからよまよと、  
 船出、解しからよまよと、  
 の店、解しからよまよと、  
 の端、解しからよまよと、  
 の菊、解しからよまよと、  
 真と降、解しからよまよと、  
 一、解しからよまよと、  
 治、解しからよまよと、  
 丸、解しからよまよと、  
 云、解しからよまよと、  
 ま、解しからよまよと、  
 お、解しからよまよと、  
 り、解しからよまよと、

昭和八年三月二日

國時今幹事一同



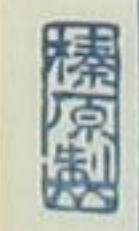
○天正年間、九州大名が野路敷中佐の志誠を表する為、  
薩馬の本山に使者を派し、此の興味深い使節である。  
九州下名との豊後有馬大村の使者の選に使者の皆十五  
六歳、少年のあり、殊に興味を深かりしものあり。  
差をよむ四人、既バウリスアン、子ムを呼び、内二  
人が使者の格にあらざり。此等使者が未嘗有りし途の旅を  
し、此種途中の事、亦班牙、ポルトガル、羅馬、  
を愛せられたる、使者自身の考の如き、  
此の人の記す、又信のし、  
程の、  
の、

下木大ら、  
こゝも、  
と、

自今、  
疑を、  
の、  
十、  
ま、  
教、  
の、  
ら、  
し、



あるは使節を飾るは年暮にあつた。當時は（ま）喜望峯  
を迂回せぬは（ま）ぬ時代にあつた。船艀も布帆の便の  
の時であつた。風を起し（ま）折角を（ま）ぬ海路を（ま）  
つた。帆風を待つ（ま）或る地獄に（ま）停船し（ま）、航行  
不便の氣節（ま）幾月も或る地獄に（ま）滞り（ま）すること  
が止むを得（ま）うつ（ま）して、現に（ま）八月間も或る一  
所に（ま）逗留せ（ま）ること（ま）ある。高は（ま）其の（ま）海城  
が（ま）より（ま）横行し（ま）、疫厲の（ま）暴威を（ま）揮（ま）つ（ま）た。  
激浪難風が（ま）より（ま）船を（ま）翻（ま）ひ（ま）し（ま）、少年使節（ま）  
七名（ま）此の（ま）危難に（ま）遭遇し（ま）し（ま）拍（ま）ふ、無事（ま）あつたこと  
は（ま）寧ろ（ま）奇蹟（ま）であつた。一難（ま）を（ま）逃（ま）う（ま）こと（ま）も、偏（ま）く（ま）神の（ま）権  
威（ま）に（ま）帰（ま）る（ま）こと（ま）である。



使節使の節の羅馬に（ま）達し（ま）た（ま）本國（ま）を出（ま）り（ま）帆（ま）して（ま）から（ま）三  
年（ま）と（ま）一月（ま）を（ま）費（ま）し（ま）た（ま）こと（ま）も、勿論（ま）羅馬  
に（ま）達（ま）する（ま）前（ま）に（ま）ポルトガ（ま）ル（ま）や（ま）西（ま）班（ま）牙（ま）も（ま）折（ま）を（ま）開（ま）き（ま）  
禮（ま）を（ま）以（ま）つ（ま）て（ま）非常（ま）の（ま）款待（ま）を（ま）受（ま）けた（ま）。あ（ま）る（ま）も（ま）為（ま）要（ま）ある  
よ（ま）い（ま）秘（ま）費（ま）も（ま）も（ま）給（ま）さ（ま）ん（ま）だ（ま）。勿論（ま）警（ま）衛（ま）も（ま）や（ま）つ（ま）た（ま）が  
海上（ま）に（ま）久（ま）し（ま）かり（ま）海賊（ま）の（ま）危（ま）険（ま）も（ま）あ（ま）つ（ま）た（ま）、（ま）そ（ま）ん（ま）を（ま）ど  
う（ま）か（ま）し（ま）こと（ま）も（ま）出（ま）来（ま）ら（ま）う（ま）た（ま）が（ま）天（ま）祐（ま）に（ま）據（ま）つ（ま）て（ま）免（ま）か  
ん（ま）。各所（ま）に（ま）長（ま）く（ま）滞（ま）る（ま）を（ま）秘（ま）教（ま）として（ま）さ（ま）ん（ま）だ（ま）例（ま）に（ま）使  
節（ま）達（ま）に（ま）羅（ま）馬（ま）語（ま）の（ま）教（ま）育（ま）も（ま）受（ま）けた（ま）こと（ま）も、何（ま）ん（ま）の  
聞（ま）入（ま）つ（ま）て（ま）も（ま）寺院（ま）に（ま）宿（ま）泊（ま）すること（ま）が（ま）例（ま）に（ま）、一（ま）言（ま）神（ま）に  
仕（ま）く（ま）て（ま）終（ま）業（ま）を（ま）お（ま）ろ（ま）う（ま）こと（ま）も、（ま）ま（ま）う（ま）つ（ま）た（ま）と（ま）ま（ま）から（ま）、羅馬  
に（ま）達（ま）する（ま）こと（ま）も、三（ま）ヶ（ま）年（ま）間（ま）の（ま）相（ま）商（ま）言（ま）語（ま）も（ま）宗（ま）教（ま）も（ま）お



當り修好が出来たと想像が出来る。

三ヶ年の辛酸を好む漸やくあるが山の本山羅馬にお  
着いた使節が秋天吉地の内へ行く事を知りてこの想  
像が成りあつた。彼等が先づ極楽浄土へ来たとの思が  
あつたからである。羅馬の上下から珠塔を迎へて、その  
を畫すに於て孰も其等が先づ想像してゐる事を知りて  
羅馬のこの事を知りて。彼等が羅馬の既往に無の款待を受  
け、終に市民権を享受するの權を得た。折あるに款  
迎へられ法皇も淨窟中寂りしれが、嗣王も亦其方  
の如き事を表さんといふ使節の支合の儀定を以て  
羅馬をよめしむることを得た。

此れがその伊人から此の遠國の珠塔を乞ふといつた道程を  
實にその如き程に成りあつた。使節の先かち行くに親を  
よめしむる事から此れを一般に親を祈る事といふ都帝の  
國民が漢をよめしむるやうな熱心な地を祈る事族の事  
を拒絶し、遂に儀禮を以て拒絶し、此れが、池公使節の  
迷惑を感じて、その如き事から、自ら感ぜられた伊  
人の通譯の事から、其の如き事から、別の日得る事から、  
此れをよめしむる使節の年若く、其の如き事から、彼等  
を受けしものから、其の如き事から、漢皇の身を持つて人  
格する、其の如き事から、其の如き事から、酒は一切口を  
為す、佛院の如き事から、其の如き事から、其の如き事  
から、其の如き事から、伊人から、其の如き事から、其の如き事





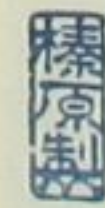






その羅向文の方の稀観するに倅うまありてあるが日  
本文の「絶勢」といふものと云ふのである。

ワルニヤーニと共ニ切羽に四人ハ其去ニ湯をいそめが道  
々邪蘇敷道言があらくさういふ新前由の北四人七  
をこせむしい境界であつた。あつて絶に位仰が厚く伊  
蘇和の他の三人も皆邪蘇敷令入つたが伊蘇ハ四十三  
家ハ痛死しふろ石ハ何かの吉地が後日位仰を去て  
中津の倒吊しり刑を多けし九人ハ若し邪蘇敷  
但室日事ハ無つたは、彼等四人の六年の共辛ハぬき  
剛くせん相吊物重さるればあつた。あつても痛しい  
いことであつた。

四人の古年使の原。あつた風来であつたか五人は  


えをいんと歌するが近年まむの徳男とえんを  
むのやうが、無つた。唯元正使の即記の若者か  
千入んに新さりの挿俗が此著の巻首に掲げ  
てあるうの平等の初めえんともあつた。各ま  
程あつたをいふとあつた。あつたか多り子母あつたか  
此のハハ差向きどうあつた。得えんといふあつた。  
此の古縁の大体をまふと四人の古年の何れも流野  
去初めが九一校の洋膳と着け、古時流行の  
つとらうつを録る巻き、肩の懸つた長袖の袍  
を纏つてある。胸の令せ目ハ長く縁とえり花模  
様とあつた。現ハし、神も約條の竹助が入れあつた  
此の服ハ五分羅馬敷皇から始るといふあつた。



が伊豆岳と思ひし、去年の金冠を持しており、白  
い手裏をおろし、長らよる千々石がある、く、他の二人  
系と中浦にある、か、何れか誰んと言ふこと、利し、直る。  
此の木は俗の彼者が訪伴の翌一五八六年獨り、  
アウグスブルグのミカエル、マンゲルの年か、訪行  
せよと、赴る、日本からの訪り、とある、か、渡田ち  
陵の研究、こよと、彼者の巡田、先々二ツの者、後を  
残すと、曰ある、一、羅馬のヴアチカノ宮、圖書館の  
リストの測ら、ある、教皇リスト五世が即位の直後、ラ  
テラの寺、く、諸者の際、並行列、か、つて、彼者、四人の、  
今、一、ウ、ビーチエンツアの「タリム」ロヤ、劇、ある、  
聖、畫、ある、か、前、ある、か、後、ある、か、

た、持、あ、る、の、こ、と、か、出、来、難、い、と、い、う、の、  
の、ま、だ、し、後、者、の、圖、の、寺、跡、武、田、の、傍、り、を、模、索、せ、ん  
か、よ、か、東京、美術、学、校、に、存、し、て、ある、と、い、う、考、え、ら  
れ、現、こ、大、正、使、節、隊、も、収、め、と、ある、。





# 早大から贈った翁の面 シヨウ翁微笑 今夜、日本にサヨなら

シヨウ翁も、九日日本に別れを告げてアメリカに向ふこととなつたが、この最後の日朝十時、早大のプリテン館からサンソム氏邸に現れ、折柄迎へに来た早大の市川又彦、かけた、先頭から一生懸命でシヨウ氏に伴はれて同大演劇博物館で、ウ翁の引つ張り策を講じてゐた。

けに、我が邦を愛した大翁の喜びが、は大なるもの、戦時や文科の専攻が二千人近くも博物館の門前に並んで身動きもならぬ騒ぎである、シエークスピアのフォアチェイン座に形取つた博物館の建物を見あげて

**懐し** げなところへ「懐し」と来たので相好くくづして大喜び、俄で空國における微笑、日本に紹介された彼を興味深げに見て回ると、日本で上演された翁の演劇、舞台を見て「こいつは作者のわしにも何だか見當がつかない」と感嘆のそき込む、親日家のメーソン氏夫妻や中村吉蔵、山岸光宣氏などに向つてしきりに冗談を飛ばし、日本演劇関係の腕の前にくると自分でバチを取つて太鼓をたいて見たり「般若石の能面を被つて化物の眞似をしたり今日は子供に歸つて大はしきまである

昨日のノー・ブレイ(能楽)でも見たんだが日本の化物は花道から三十分近くもかかつて引込んで行くのに外國の化物は舞台の上からせりだしてやつりあげで忽然と消えるのは面白い對照だ約二十分間博物館を見て大隈會館

**握手** に出でくる、早大ではかねてから用意してゐた日光鏡作「翁」の能面を贈つて、先生の御長壽を祈りますとやれば、忽ち「わしは今でも長生きし過ぎて困つてゐる、もう長生きは出来た」と得意の皮肉で贈答する、兎に角手におへない爺さんだ

大隈側では要應これつとめて和田冠十郎といふ人形使ひのお爺さんをつれて来て文楽人形でぬれ場やハラキリの場面を演演して見せる「こいつは教へられるところが多い」と立直つて熱心に使手の動きを見つめるシヨウ翁の顔は子供らしさも失せて鋭い輝きに満ちてゐる中々動きさうにもないのを同道の市川さんが心配してせき立て十一時生英大使との約束の時間に大使館に歸つた

午後には始めて上京するシヨウ夫人と郊外散策をして疲れを休め、夜プリテン館で日本に「サヨナラ」をする豫定(「眞實は早大から贈つた面をかけたシヨウ翁」)

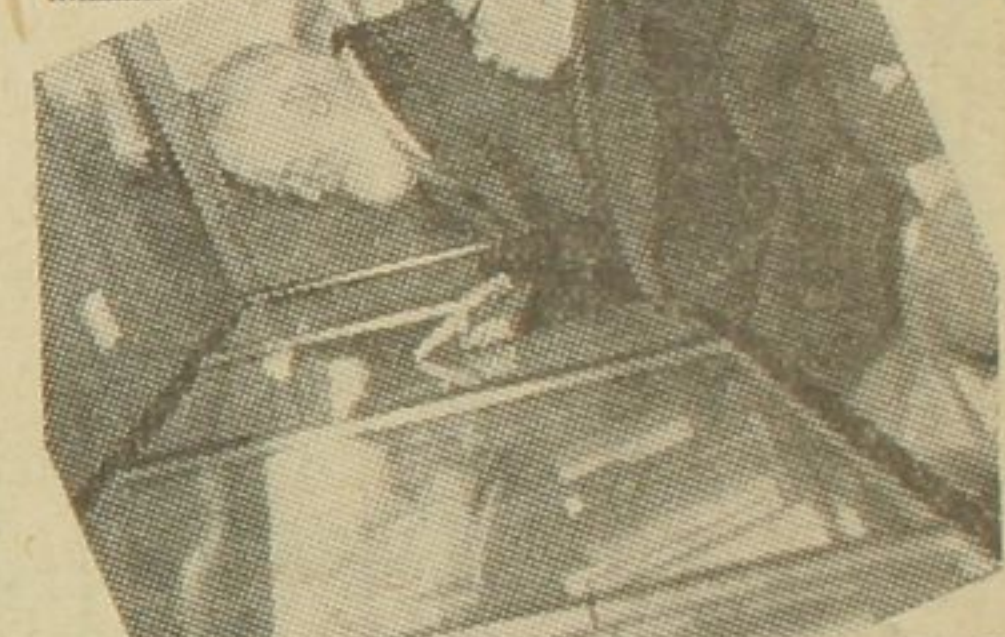
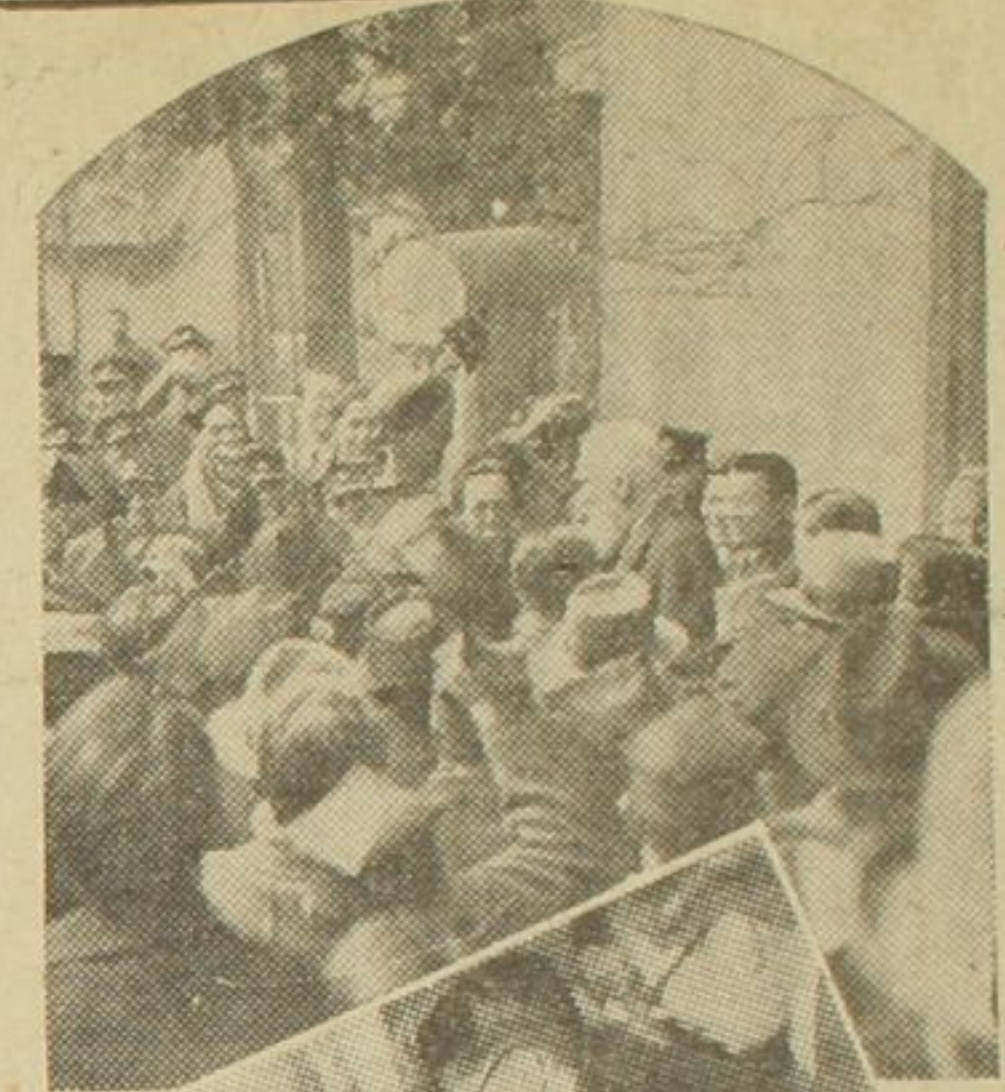
# 東京日日新聞

相 人行設別印登新編  
京東社聞新日毎京大  
一十月一丁一第有區町館  
設聞新日日京東

下出来・四上巻  
動物學汎論

珍らしや大石老  
けふ首相訪問

# シヨウ老いろく



# ハラキリの型に 人並みに感心

つた故郷長の居室でコーヒーをすりながら早春の日本庭園に見入るが感心したと見えて眼鏡を取出すとそこへ水谷八重子が現れて人形をプレゼントする、八重子なる者の説明を聞いてゐた老やをら椅子から立上がりつて八重子と握手を

がはじめられた、喜感喜感さまさまの表情が無表情の人形からかもし出されるのに感心耐へたらしく再び眼鏡をとり出したが「光線の丁合でよく見えな」と椅子を元十郎のそばまで持出し「ハラキリを見せて下さい」との所望だ、聞

大連の各支店にも極秘裡に「非常に興奮し上から、早大學生に迎へられて……この印税をよこさんね……」と自分の翻譯書を見つめる……トシ、トシ、トシ、太鼓の音に興ずる……この頃はどうかや。





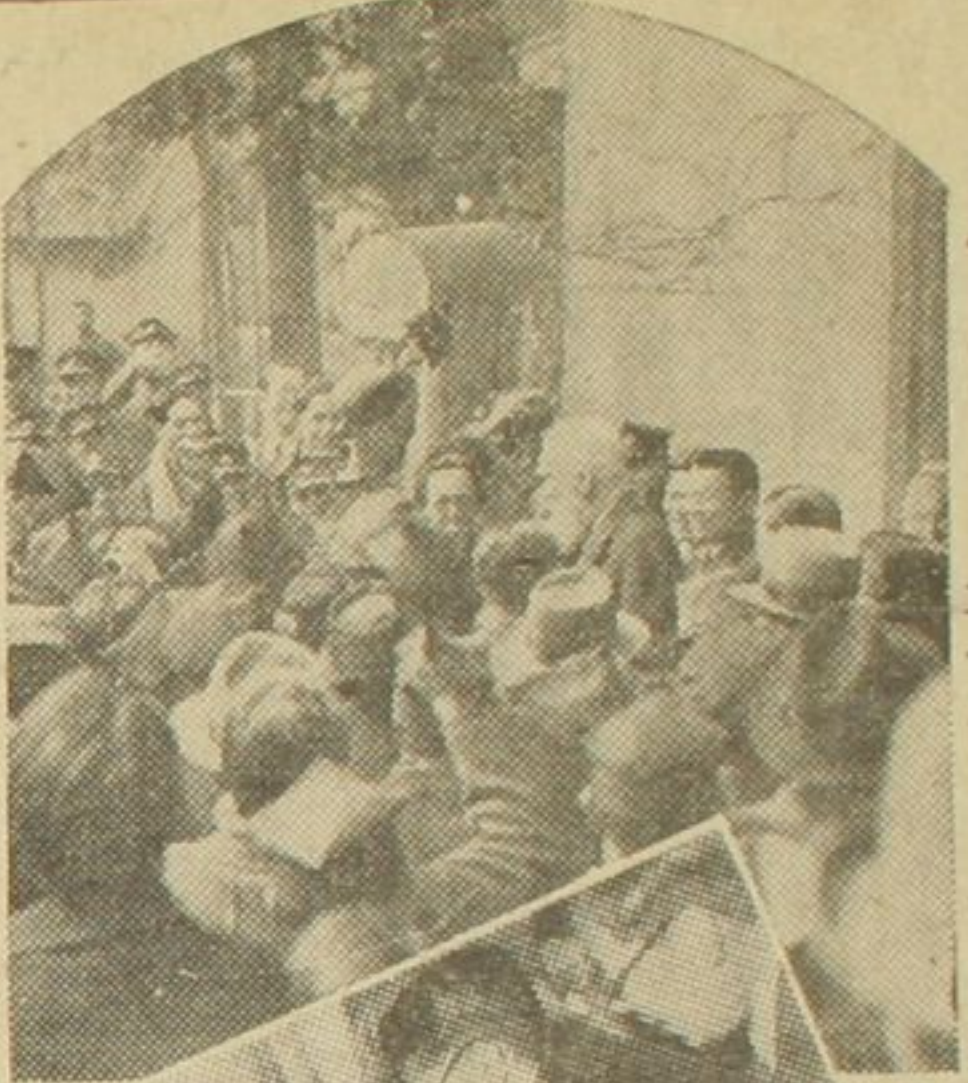
シヨウ老、九日日本に別れを告げてアメリカに向ふこととなつたが、この最終の日朝十時、博覧の

### 今夜、日本にサヨなら

## シヨウ老の来日

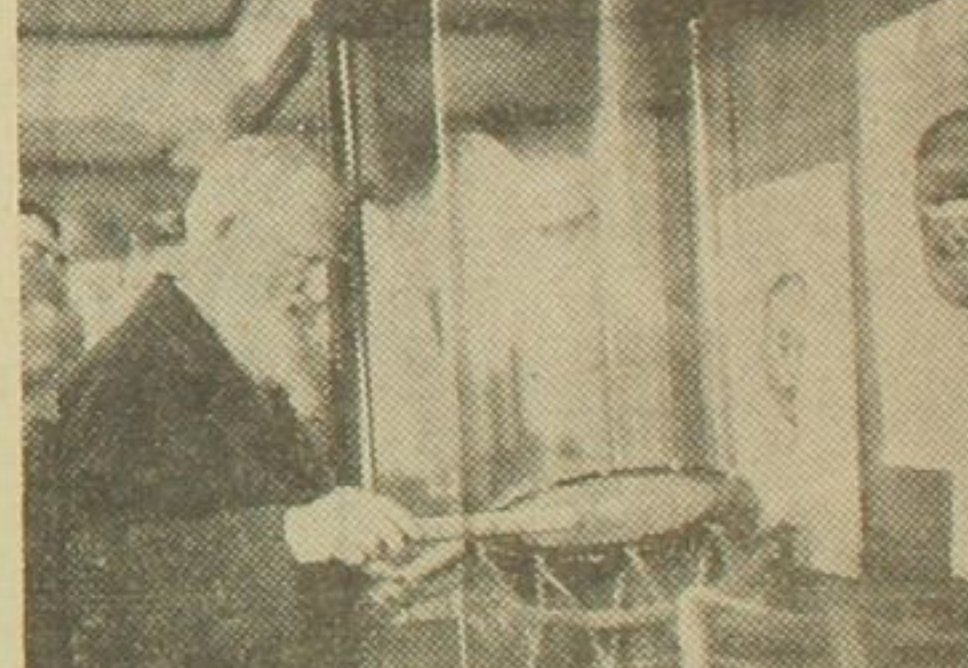
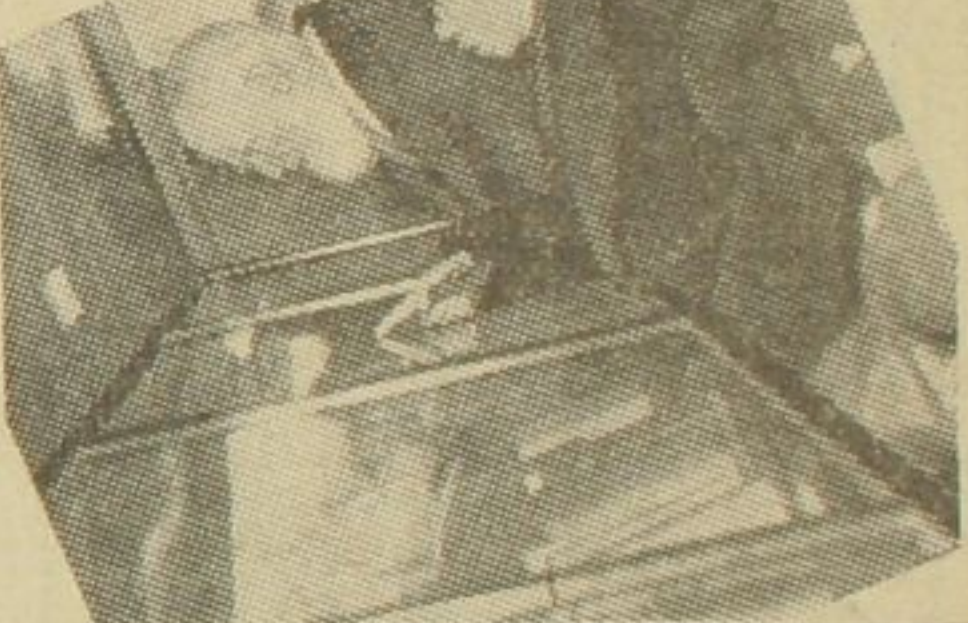
シヨウ老は、九日日本に別れを告げてアメリカに向ふこととなつたが、この最終の日朝十時、博覧の

シヨウ老は、九日日本に別れを告げてアメリカに向ふこととなつたが、この最終の日朝十時、博覧の



### シヨウ老いろいろ

大通の各支店にも極秘裡に「非常に興奮し上から、早大學生に迎へられて……この印税をよこさんね……」と自分の翻譯書を見つめる……



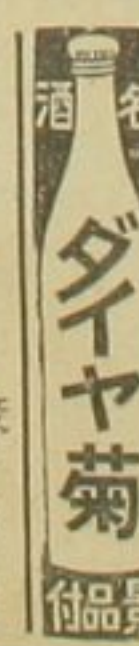
## 人並みに感心

### 早大を訪ねたシヨウ老

いよく日本にサヨナラをする九日、シヨウ老は博覧のフリンテから自動車に乗せて午後十時、早大の演習館に現れた。ちよと寒いせいか鼻の頭を真赤にし、博覧館の前には集まつた早大の學生や女學生が「シヨウ老、お天候は日本晴れた」などと歓迎する。歓迎の言葉と間違へたらしい老は手を振つて「お天候は日本晴れた」

つた故郷長の居室でコーヒーをすゝりながら早春の日本庭園に入ると感心したと見えて眼鏡を取出すとそこへ水谷八重子が現れて人形をプレゼントする。八重子なる者の説明を聞いていた老やをら椅子から立上がりつて八重子と握手をしながら小聲で「全く可愛い綺麗な方ですな」にさすがの八重子もちよつとてれて顔を伏せる。そばから田中總長が五百年前の月光作になる「翁」の面を贈るとますます翁は長命の表裏ださうだが、老はこれにあやかり度いものだ、だがこんなに頼りがいがあるのは困るね」と何層も被つて見る。

握手に出でくる、早大ではかねてから用意してゐた日光鏡「翁」の能面を贈つて「先生の御長壽を祈りますよ、さすればおわしは今でも長生きし過ぎて困つて、もう長生きは眞実だ」と得意の皮肉で贈る、兎に角手におへない爺さんだ



ダイヤ菊



の昨今流りの玩具は、こゝろと云ふものは、  
扁平のコマや、やうやうのこま、結んで釣り上げ、  
り釣り下げたりするもの、手か敷するもの、  
自在な手えさむ釣り上げ得るもの、不図か玩  
ぶもの、あつちとく大人も黙人がみる。米田へ行ん  
てみる。こゝろと云ふ、四年も前米田へ見  
た人が、之を世のこまを賣り出し、此の時の誰か願  
ふもの、こゝろと云ふ、今の大流行のこま、  
りとも、こゝろと云ふ、今の大流行のこま、  
西澤南畝の清く、こゝろと云ふ、此の玩具は、昔  
しから日本にあるもの、お徳の手車」と云  
ふとある、其者、此の如し。

横濱製

近世時人歌の中に「お徳の手車」とあるのが正にこれだ。享保の頃、京に手車の翁といふ者があつて、此の玩具を賣り歩いてゐた。

「これは誰のものぢや」といひ、手車を動かしながら又自ら受け寄へて「これはおれのぢや」と調子よく廻しながら手車を商つてゐた。後に難波へやつて来て、矢張り買ひろめてゐたが、途にある家の軒下に懸座して、その傍らに卒塔婆を立て、そこであへなくなつてゐた翁のあたりには、神世の歌が残されてゐた。

「小車のめぐりて今こゝに、立たる卒塔婆、これはおれのぢや」と、次に「守貞漫筆」を見ると、寛政年間、土壁の一丈五分ほどの大きな菊の

花形を、胡粉でぬり、二つ合せ、その間を二分ほど隙あかせて、管でつなぎ糸をつけた玩具を釣籠架、又は天の釣籠架と稱したとある。手首をわづかに上下すると、これが廻りながら二三尺上下する。お徳の手車の事も初めは土で作られてゐたらしい。

京に起つた手車が大坂に傳はる文化、文政の頃には江戸にも流行を來してゐたやうだ。「近世時人歌合」には「糸ぐるま」の名が見えてゐる。竹を管としてつないであつたもの、やうで、赤の木綿糸にて

釣さげ、引上げて、妙といふ風にしてあり、儼は四文であつた。寛政五年ころは又流行を盛り返してゐた風で「家賃備」といふ本にお徳の手車の翁の圖がのつてゐる。「年月を早くめぐれる手車を、もつてあそびつゝ思ひめぐれば」といふ歌をこの頃は口ずさみながら行つたもののやうだ。京大坂にも享保時代の歌が残つてゐる。「手車ちや、お徳どの、手車ちや一文、一文」

といふから、その頃は一個一文、二文、三文、四文に比して、物價の暴落もうかゞへると思ふ。

江戸にあつた歌は「めつらしい、天の釣籠架でござい。下つてしまひますと上りまする。アリアヤ下り切つたら上りませうござい」といふのだつた。手さびと共に唄を歌つた習はしで、先頃フロロダのホールで聞かれたヨイヨーの歌、何かしら唄つたことだつた。

明治十七八年に大坂でこの歌が復活した頃、これが求められな者は土瓶の蓋を代用したといふ説しを

古老が、してゐたが、私たちがこんな事をやつたのを覚えてゐる。二百年も前に發明されたお徳の手車、釣こま……と名こそ變れ天晴れヨイヨーに相違なしなのだから、現在大流行するのを見て古い記録を眺みるのも意味なきものであるまい。たゞ、もて遊びの方法が洗練され、衣裳に新味が加へられてゐる點が、大衆の興味に投じたものと考へる。







と欲はんは。俗書さうさう宋版のけりやと云ふは。志不  
し揮画の人の腹物に似るはかあるの宋代さうさう  
かまへのる何故かあるさうか。

その譯題の書証各の用語を前田より引くも。堀定  
すこととあるは。五山版の範圍や活字本の名称を  
三種に分つことや。復刻本の解釋をいかに議論した  
ゆりさうして討論を二時刻を費しは。従ふ決する  
不があるは。堀定の後果も次那の考證を。載る  
異心からこころ略しておく。此も又ある特。自分  
に示しは。倭古印二十顆は。つと押しは印簿冊の  
由る自分の知つたものよ。か唯以一顆あるさうさう。他  
ハ皆知らさうさう。かあるは。自分。大概倭古印の

印を所持してあるが。友人と全部如き見ると印  
のあつた。珠と云ふへき。此印の其内。あるの  
こゆさうさう。から。其曉る。印を中受け  
は。いと思つてみる。次今来四月八日。早大園者館の  
為本を見つことの中。公を。三月十二日記  
〇一昨三月十日。十八年前日露の戦役。皇軍  
が奉天を陥れ。大捷の日。吾陸軍が紀念と  
して。忘らん。自辰であるが。此日。恰も。熱河討伐  
軍。長城を迫る。敵を掃掃攘し。長城を奪  
く。吾日軍。を翻す。さう。長城。我軍  
の神く。有。史。以来。初。七日。こと。皇軍。の。以。る  
太白。を。奉。け。て。可。き。経。て。二。代。榮。業。を。極。め。清



学良の命に取裁の責を測らん。没後其の最後を  
逐け此れ此の心向ふもめだれいぬ日かあつた。

○三世相の日本には是れ流布した供書ひある。三世相  
と云ふは現在未來三世をさして云ふの事と  
佛家の因縁を下筈の方法を傳へて、玄奘禪福  
因果を報と説き、その事日本も種々の  
版あり、志かしく支那の三世相を倣らむもの  
支那の三世相の日本に覆刻せんもの嘉靖  
の版より元和（原希）寛永の版分註刻せんもの、然るも  
宋槧に早く此書あること人多く知らる。嘉靖  
版の蓋し宋槧の基のきり、よるらん。此書の著者  
は唐初四の袁天綱にして此の宋槧をの唐中

より入此書との中先歎而所花を今内唯較  
考の有り、惜しいや首に字一葉の、を缺く  
供書より跡とすへきハ吟入本と宋時代の凡  
俗に徴し得るハ故也。此書の原名は漢金斗教  
三世相也

○椿山が字して朱子の像に當る勅記撰者の姓名  
所とす其像は長千四と云へたが、その大雲火に  
灰燼とるに、その像は只粉本一帖を齎し、未  
くよのあり、椿山の図考記もあり、身碎墨紙の紙中  
極もあり、卷あり、華石の葵是七あり、圓の粉本  
あり、その名も粉本、華石、山と名も先づ三  
十よのと思へ、あるは、その書の名も、その日本



の著るる人かもの肖像でもあふふと思ひさるるあはれ  
程の安つた物のこころも思ひ出む。愛揚の念動を  
志がくく候かつて床を掲げを親しみつゝ三月  
十考の記

○祇徳とよぶよふれと書しれ後、芝草更が左の句を  
一と四つのをえれ

芝草更

まのあつたゆきまきしきさけり  
此句のこころも思ひ出えり

志草のあふりの人やまのあ

まのあつたゆきまきしきさけり  
まのあつたゆきまきしきさけり  
まのあつたゆきまきしきさけり  
まのあつたゆきまきしきさけり



ふこころを致ししれふこころ味かあふ。



○リットン卿が満洲國で執政濤儀に面して時皮  
肉の所欠詞を放ち閣下の身色もいふ多数の日本人が  
官吏に任用されてゐる者がなくとも云ふに否、執政  
ハすかきず、自分の身色も兵の日本人の皆を  
予と名を因ふするに、自分の信任しておる人ば  
かりだ。丁度若しアメリカが吾國の專政に依  
つゝかゆを獨り以て、特におつらんからラフアエ  
ット等が出クけを援助し、ギリシヤの獨り云ふ

貴國の詩人バイロンが援助し、リットンハポー  
ランドにフランス人が活躍し、チエツエ、スロヴ  
アキアでハ、吾米利加人が援助し、ルヤうらとあ  
れと云ふ、此の、リットンをギヤロフと云はせ、  
ハカハク  
○或る支那通の流のあり支那の、大の大概瘦せりぬこと



○毎年一回予の誕辰二月十七日と以て名開合を例とする  
赤城合の予の都合は七月迄行い昨十七日木柵川の  
常盤堂で開合すべし。而も出席者は二十名を超へておの



は合があらね、自分ごと毎年一々自分のものを愉快とする  
此合に於て諸人と見あはしむ存と挨拶し、まんじり三合漬  
説き移り出席者は全部が暖かい起りと思ひくつろむを休  
べ合、おぼゆる柵部をすまふこと。例の如く、中、日、別派  
時間と起て十分以上の演説をすまふもあつても、約一時  
間就聴を由義、すまふべし。皆々の演説終つて自分の演  
説の挨拶をすまふべし。或は一時開合のすまふつらういこ  
と、此、若し、人が自分のことと関係からすまふつらうい、幸抱はし  
まんまかつたらう。何んぞ、予の演説の言はる、ことばは自分か  
演し、そのことばから、酒も飲めず、指法も出来ず、座を起つことせ  
未だ、人のすまふあつたらう、連々幸抱が出来らう、つらうと云ふは  
古び久遠だが、實に演説者、位七々の勝負を言ひ分は、お







けり教令し。例に依り、個人も家庭の土産として菓  
子を領つ。 三月十日記

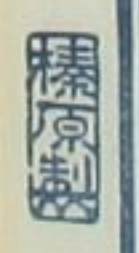
○先頃、熱海へ過つた詩人田色松俊より一詩を寄  
せり。

邂逅逢高士、卅年空記名。共向山亭酒、一  
笑肝腸傾。談古還痛飲、悔日吾徒識。

荆

松俊、愛劍を授け、軍果に飲む。記の前巻にあり  
り。冬、親とてし。

○ふ、敬業中、杉平、冠山、後、白草、江、府、近  
親音、千、因、寺、巡、禮、記、二、冊、を、得、た、序、文、に、據、り  
と、是、の、書、り、子、の、節、人、を、笑、ひ、その、供、養、の、ゆ、り、と、



親しく、因、寺、の、親、音、を、刊、し、た、札、を、納、め、且、つ  
千、首、の、歌、を、採、り、千、因、寺、の、巡、禮、畢、り、つ、持  
佛、を、拓、き、湯、野、の、回、向、と、記、す、み、多、と、あり、即、ち  
文化五年の、睦、月、の、朔、の、十三、日、丙、子、の、神、田、無  
月、に、利、り、千、と、湯、ら、つ、と、之、の、つ、と、の、を、と、之、の、を、  
立、属、の、々、々、に、任、す、と、之、を、善、提、と、世、英、ふ、こと、ハ  
百、ん、の、千、因、寺、の、親、音、を、納、れ、し、一、首、つ、歌、を  
採、り、し、る、の、珍、し、し、

三月十日記

○前日、朝鮮、あ、王、子、紀、蹟、碑、の、拓、本、を、得、ん、と、し、  
糞、糞、し、し、後、必、難、く、宮、内、省、同、書、寮、の、橋、井、因、  
書、に、托、し、膝、字、を、拓、め、し、如、の、一、漢、字、を、得、ん、と、  
也、碑、の、威、鏡、北、道、鏡、城、郡、龍、城、面、龍、郷、洞、に、在、



有明朝鮮國西王子紀蹟碑

昔在大明萬曆甲戌，宣廟壬辰，島夷未戢，八路搶攘。龍馭西狩，賊鋒莫遏于時也。王長子臨海君諱肆次子順和君諱玘及丈人避兵燹而入關北陪行之四朝臣。即上洛府院君金公貴榮也。長溪府院君黃公廷或也。及丈承旨黃公赫忠肅徐公洵也。時會官叛賊景世等嘯聚播亂，業皆突突縛執。西王子及四陪臣將赴倭，將清正於吉州，欲以爲質，路經鏡城之龍城社時，夜有星彗于北斗。本社有慶士朴公惟一卽慷慨忠義士也。念賊急之方熾，憂國執之將危，晝宵憂嘆，忽一日夢二虜降于西麓，爲蟲虻所困，覺而心異之，亟起往視，則果有土賊屯聚。西王子及四陪臣方被縲絏，事將叵測，卽俄夢龍降之所也。憤不顧身，冒刃直入，瀝忠肝而泣喻勸，數仁義而告曉，賊乃感其誠，散而去。朴公手自解縛，身以爲御陪歸，其多極意供護，雖家人不侵執，近者凡葺再周而亂猶請於是乎。躬自陪奉護，踰險阻于其解歸也。王子同姓名而不言，後又物色求而隱不現，及聞忠教，鄭公文字以評事而與本府士人朴子錫壽等起義兵，性從而同事焉。噫，朴公之赤忠丹誠，可以竹實神明而無作，亘古今而鮮儔，譬諸世之自銜沽售者，果何如哉！于後，聞公鼎重以道伯而終。聞朴子公端夏以評事而陳疏，李恕裕朴湜李與夏等以儒生而相繼上言，始建彰烈祠以公配享而職。贈佐郎嗚呼！西王子所任之宅卽朴公之第也。自壬以後迄今二百七十有餘年，而其雲仍世守，歸然特立於閭里之中，草野之間，未去之官人，南北之士女，皆與指點而傳焉。歲季亥冬，不信以評事之任行過龍城，爲訪其冢礎，柱也，樞軒也，依古而無易，其址也，草木也，敬瀆而留彩。王子之於斯焉，起辰

誠敬而去。朴公手自解縛，身以爲御陪歸，其多極意供護，雖家人不侵執，近者凡葺再周而亂猶請於是乎。躬自陪奉護，踰險阻于其解歸也。王子同姓名而不言，後又物色求而隱不現，及聞忠教，鄭公文字以評事而與本府士人朴子錫壽等起義兵，性從而同事焉。噫，朴公之赤忠丹誠，可以竹實神明而無作，亘古今而鮮儔，譬諸世之自銜沽售者，果何如哉！于後，聞公鼎重以道伯而終。聞朴子公端夏以評事而陳疏，李恕裕朴湜李與夏等以儒生而相繼上言，始建彰烈祠以公配享而職。贈佐郎嗚呼！西王子所任之宅卽朴公之第也。自壬以後迄今二百七十有餘年，而其雲仍世守，歸然特立於閭里之中，草野之間，未去之官人，南北之士女，皆與指點而傳焉。歲季亥冬，不信以評事之任行過龍城，爲訪其冢礎，柱也，樞軒也，依古而無易，其址也，草木也，敬瀆而留彩。王子之於斯焉，起辰



處士之於是焉游息猶可依穉想像徘徊周瞻之際處士之後  
孫敏樹揖余而告曰大凡賢人所過之地必有雷蹟何哉 王子所  
任之第不可與紀邑人多士衛志未遂殆為哉否禮々々今幸郡  
有司事弘毅兼畧而建議前僉使馬行逸竭賦而量工將欲樹碑  
而紀績以爲歷久不泯之方乎適又評臺之行應訪於此以  
誠不易之奇會也請余作記余以文拙爲辭及到行營兵相李  
公燦余而言曰君曾聞朴處士古宅 兩王子遺蹟之事乎余對  
之以所聞睹兵相怡然而嘆曰君以評事過此則不可不辭其清  
矣言其記之我當書之君我得以當名於其間不亦美乎余  
於是乎不可不辭也文辭遜略畧其槩而謹記

御宗海軍行威鏡北道兵馬評事兼陞市御史李鍾正環鏡改以原字  
至前義大史威鏡北道兵馬水軍節度使兼鏡城都護府使李南甄書

出宗源紀元後五乙丑月 四三

とあるものゝ李大王二年乙丑即我慶長元年  
建つ所と云ふ事の近年の建碑といふことゝ氣分  
付いた。

○文藝春秋の四月號に大雅堂の氏名雅堂  
と就ての考証が載つてゐる大雅のことゝ後考  
とあるが此位委しく考証し此の自今人の如  
めて見る所が載つてゐることもいふから切  
り抜とこゝに云へると他の先考も併する三  
月十九日記



花などを置くべきで無いと思ふ。然るに何時の間にか形式的な裝飾的なものになつて棚の下には普通袋戸が設けられるに至つて最早棚の下に膝を入れて書見などは出来なくなつた。此一の間の上段の間では斯かることなく棚の下は開放して疊が其下まで敷き込んであるから、所謂明窓淨机に倚つて想を練ることも出来るやう實用價値は十二分である。此三疊敷は一小樂天地を形成して連棚に手を延ばせば其上に並べである参考書を坐ながらに得られるであらう。

## 大雅堂の名字號

人見少華

### ○又次郎

大雅は幼名を又次郎と云つた。父は菱屋嘉左衛門といふたが、實は洛北深泥池(又雷音池、今屬京都市左京區)の棄兒で嘉左衛門の實子ではない。

又次郎といふ如き名は別に詮索する程のて書畫、石印篆刻などの需めに應じ、和襖、唐様の畫扇を賣り初めた。そして名を耕、字を子職、號を爲龍と改め、待買堂、又袖龜堂と云つた。

なぜ改名、なぜ移居をしたか、孟子萬章の條に、

「我竭力耕田共爲子職而已矣。父母之不愛我、於我何哉」とある。父母の我を愛せざる我に於て何ぞや——子として職を共にし、力を竭し田を耕す——とは即ち孝子の心である。耕、子職の名字の來由は又こゝに存する事明白である。而して現在母と同居するが、父のこゝに居ない事、且「不我愛於我何哉」の句を考察して見ると、曩日、何うも家庭に一波瀾があつた如うに思はれる。而も大雅には既往の父の恩をおもふ時、今日父が如何な仕打ちに出やうとも、其恩を忘れ去ることはできない。此の苦しい思ひを懐いて紀念の改名であつたのである。

國寶 黃山萬福寺 撰

父と母と、或は父と大雅と、其中らひの委曲波瀾は想像を深め行けば複雑限りがない。

て、或は隣邑橋枝八幡宮か圓通寺にても往來する貴人の落胤ではなかつたか。

### ○子井

十二歳の時、壇主法林寺(三條川端東入北側)の清光院主慧徹に就いて養拙流の書を習つた、慧徹は一井と稱したので、其「井」字をもらつて子井と號したのであつた。(兼葭堂雜錄に十三歳と記せるも、十二節の書に既に子井の號を見る)

### ○井

幼名を井——「トン」と云つたといふ説がある、トンの訓は恐らく誤であらう。井の字はタン、トン、セイ、シヤウの四音、其處で誰か「トシ」と稱び、「犬の虚萬犬の實となつたのであらうが、井字は篆體に書く時井に作るころから推せば、井は正しく子井のセイであらねばならぬ。(二字名の下一字を書きすることは古い例である。)

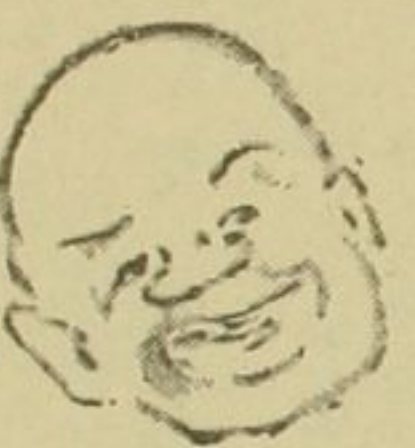
### ○耕、子職、待買堂、袖龜堂、爲龍、

十五歳の時西陣から二條樋口(今の二條木屋町)へ母子二人で移居し、一店を開い

必要もないが、次男坊の意か、兎に角嫡子ではなさうな名である。傳ふところ葉子の時尋常でない衣裳を着けて居た、五月八日生、「又次郎」など書き付けたものがあつたといふ。何の故に、誰氏が棄てたのか委曲は知る由もないが、當時の藩衣の様子と、彼が異常な人物であつた點から推し

いから穿鑿は他日にゆづる事として、兎に角父と母子との間に居を別にせねばならぬ事情が生じた證據といふにとどめる。

次に待買堂の名は、論語に「子貢曰 有美玉於斯 韞匱而藏」



諸 求善買而沽 諺子 曰沽之 設沽之哉 我待買者也」とある。いふ所は、孔子の仕を求めざるを諷するに、孔子を美玉に比す。乃ち仕は策

を以て求むべからず、自然の道を以てすべし——是水善買を待つ者である——の意。これを見ると、大氣焔の堂々たる開店の宣言たる堂號である。換言すれば「私の店は無理には賣りつけませぬ」といふことになる。

次に袖龜堂の名に就ては、或は神龜堂であらうといふ説もあるが然しながら兼葭雜錄に正しく衣扇に由字に記すのを見ると、袖はやはり袖であると思ふ。其は石印篆刻を業とするところから命じた堂號である事はいふまでもない。

即ち「龜」印也(大支經「龜綱」印以龜爲紐故亦稱龜)

「龜綬(後漢書西域傳論)注、願謂印文也云々

等を按ずるに、龜を袖にするは即ち印願を手にする意である。

次に爲龍は、

是歳(十五歳)桑原爲溪の門に入つて書を學んだ、爲龍の「爲」は爲溪の「爲」でもあり、又龍は「非常の人之を皆龍といふ」故に、彼も非常の人と爲る意にて爲龍とし



たものと見る。

たものと見る。

○菱屋嘉左衛門、勤、公敏、九霞、大雅堂、竹居、玉海、

二十歳の時聖護院へ移居した。と共に父の襲名して菱屋嘉左衛門と稱し、名を勤、字を父敏、號を九霞と改め、大雅堂の名を初めて掲げた。又別に竹居と號し、玉海の號をも用ひた。

こゝに菱屋嘉左衛門を襲名した事は、想ふに此年別居して居た父に死別したのではなかつたか、或はかの西陣より二條樋口へ移居して十五歳の少年の身を以て一店主となつた境遇を考へると、既に父は彼の時死んで居たかも知れないが、もし其當時死別したものならば、其際襲名して然るべきを二十歳の此年初めて襲名した事は疑問に値する。又様々に、憶測をめぐらせれば、十五歳の時の移居は何かの事情で父が身を隠晦し、而して大雅の二十歳の時遂に逝去の報にでも接して遂に悲しくも襲名に及んだものかとも思はれる。(嘉左衛門を嘉右衛門に作る書あれども、左衛門を正しとす) 勤、公敏、の出處に就ては、嘗て長尾兩

山先生に之を買した處

「御話の勤字公敏は「北齋書額之推傳」に處事勤敏。號爲稱職。の語より出たる歟と存候、心付き候まゝ云々」との御教へを忝うした。なほ彼の字に關する個處を探ると、論語堯曰第二十に「寬則得衆。信則民任焉。敏則有功。公則說。」とある。勤勉で働き敏ならば事成就す。偏狭でなく公平ならば人説ぶ。——以上の句意を考へて見ると、略ぼ意中が察せらるゝと思ふ。

次に九霞は、大雅は音楽を愛好したところから選んだ號であらうと思ふが、佩文韻府を繕くと「宋史音楽志」——「太宗所製之曲有九霞雙調」とある。猶ほ「曹唐卜遊仙傳」——「西漢夫人下太虛」九霞裙幅五雲輿」

「許慎詩」——「閨苑花前是醉鄉踏踏王母九霞觴」  
「楊維禎紅梅詩」——「十二闌干明月夜九霞帳暖睡東風」  
等の句を見る、兎に角九霞撫者が佩文韻府から思ひついた事は確かであらう。

次に大雅堂は「詩經」の

「詩大序」——雅者正也、言王政之所由廢興也。正有「小大」故有「小雅」焉。有「大雅」焉。

とある如く、大に正しい意である。而して前期二條樋口の「道を以て買を待た」——一商店主の待買堂主人は、大分文墨風韻の間に知人が多くなつて、商賣が懶くなり、専ら書畫を以て立つ事になつたのであらうと思はれる。勿論然う云つた心境であつても、従前の關係上、一面二條時代と相似た生活を續けた事は想像される。

次に竹居と云つたに就ては、或は其居齋に竹を種えて居たであらうし、彼が遺墨中に随分多くの竹の畫が、様々にかゝれて居るのを見ても王子猷を慕ひ命じた別號であらうと思ふ。

大雅が子猷の癖に就ては、寶曆十年二月竹苞樓が刊行した「賞奇軒墨竹譜」(東坡遺意)といふ書(序文高葛陵書者大雅堂門人阮自千)其原本を大雅が愛蔵して居た——其の序文中に「平安池君貸成夙有子猷之癖、乘興之

時旁求子瞻之遺云子瞻遺意有華本貸成

適得而不翹於玄珠乃貼之東壁彷彿其側盤礴其下揮毫以擬其化云々」乃ち竹居の命名はこゝに胚胎するであらう。

次に玉海の號は、彼の郡山の柳里恭玉桂先生に師事し、其の玉の字を頂戴したのであるが、此號は二十歳以前に既にもらつて居たのかも知れぬ。柳玉桂先生に初めて會ふたのは、彼の十四歳、祇園の現長櫻で偶々先生が櫻町天皇御登極の御賀を申述べべく入浴、こゝに登壇して居り、やがて主人に其勸定書を求めた處、ちようど來合はせた大雅が其勸定書を樓主の代筆した、其書のためならぬに玉桂先生大に驚き少年大雅を引見したのであるといふ一説。又一説十六歳の時初めて會見、彩色法を問ふたといふ。

以上兩説、初對面が何時であつたにせよ一方は物數奇な柳里恭先生、一方は勤勉な大雅の事、會見、其意氣の合つた以上、間もなく入門の禮をとつたかと思ふ。さすれば海玉の號は多分二十歳以前に頂戴したのであつたであらう。

因に、この玉海の號は、門人原章、即ち前記阮自千が大雅翁歿後に用ひたので、この原玉海の遺墨を大雅が玉海時代の作と思ひ違へる人が往々あるが大雅の玉海時代は細筆で決して晩年の體のものはない筈だ。

○秋平(綿屋庄兵衛)

二十歳の時菱屋嘉左衛門を襲名したが、通稱は専ら池野秋平であつたらしい。この秋平の名は何時から用ひ初めたか是も判然せぬが、内田富房記に

「寛延元戌辰九月渡邊玄的老同道にて池野秋平來る席畫あり、其頃指頭畫の名人云々」

又馬場文耕が「當世武野俗談」にも「當時江戸のみに限らず三都にて繪師の名人といふは池の秋平號を九霞といふ元京都の者にて綿屋庄兵衛といひよし也幼年より畫に心を用ひ家業にかまはずと云五指にても畫くと云戌辰年十月江戸へ來り諸侯太夫の館へ召され席畫などせし也云々」

などあるを見れば、寛延元年の秋は江戸へ來て居り池野秋平と名のつて居た事が知ら

れる。而してこの秋平の名の由來は、かの深泥池で父嘉左衛門に拾はれたのが七月十八日であつたといふので、七月は時秋、日の一十八は平の字となる——天涯子然路傍の露にぬれて居た嬰兒が、うれしくも父に拾はれ、慈まれた高恩を忘れまい爲の記念の命名であつたことがわかる。彼の用ひた印の中に「深泥池氏」といふのがあるが、深泥は所謂深泥池を意味するのである。池野秋平の名は菱屋嘉左衛門の名と共に彼が終生用ひたところである。

尙、當世武野俗談にいふ「元京都の者に綿屋庄兵衛といひよしなり」とあるは、或は、或處にて戯れ半分にさる名を名のつた事があつたかも知れぬが、彼が正式に名のつた名では斷じてないと思ふ。

○三岳道者

大雅の用ひた印の印文に「四行に「成辰登富士山己巳登山庚午登白山」と、も一つ三行に「己巳登山」——といふ二つの印がある。後、寶曆十年六月二十七日發足、高芙蓉と、韓大年と三人連て、富士、立山、白山を巡り、是より三人共三



岳道者と號して居り、且相共に其號印を持  
つて居たが、大雅は前に單身三岳に登攀し  
て二氏より以前に三岳道者と號して居たこ  
とは其遺墨に徴して明かである。單に三  
岳、或は三嶽逸史、なども書いた。

○無名、貸成、戴成、

二十八歳の多十二月紀伊に入り祇園南海  
先生を訪ふた。今井元方(和歌山藩醫、號  
一志齋、又處常菴)の隨筆「雜識」(未刊本)  
池無名が名和訓の事並池無名書風の事」と  
いふ中に

「(前略)南海先生貴所の名は何とか申さ  
るゝと問、秋平答て無名にて候と云、是は  
秋平名はいまだ無之候と云に略してい  
たる也、南海は無名といふを則名と心得  
られソレへ面白き名にて候と云、秋平其  
時いや名はいまだなきと申たる也と云、  
南海されば其無名と云が則名に宜クソレ  
を名と致されよと云て則字を戴成(少華  
云、此時は貸成なり、戴成の字を書きし  
はも少し後年也)と付られたりと云、  
此無名と云字を和訓にては「シゲ名」と  
よむよし也、「アリナ」など訓つたるも

あれ共夫レは非也とぞ。元方案、無ヲシ  
ゲトヨムハ是無ノ字ニ通シテ「シケル」ト  
云訓ニヨリシゲトヨミタルカ、イカゞ猶  
俟後考。

「無名天地之始、有名萬物之母、故常無  
欲以觀其妙、常有欲以觀其微、兩者同  
出而異名、同謂之玄、玄之又玄、衆妙之門  
云々」

又、大器晚成、大音希聲、大象無形、道  
隱無名、夫惟道善貸且成。

より取つたので、人身一念不動の時は無名  
に當る一餘り老子の講義めて煩はしいが  
従前一般説たる「アリナ」の解は「有名、  
無名の名を異にするも、もとは同出だ」と  
いふにある。それ故、南海先生も、畢竟「無  
は有名も同じだ」と説いて大雅の爲人と技  
巧を稱揚して命じたものでもあらうが、大  
雅が無名を自分に何と呼んで居たか、其は  
對する人の場合によつて説明も種々にした  
かも知れぬが、自ら、敬稱の意味に、南海  
先生から選ばれた有名「アリナ」の呼稱  
を下すことはなかつたであらうと思はれ  
る。即ち、元方の訓の「シゲナ」が實であ

つたと解するが穩當ではあるまいか。  
さて、後、貸成を戴成にも作る事があつ  
たのは如何なる故かを見ると、彼の當時支  
那に做る雅名の風習から、戴氏といふ名に  
見せかけたのであらう、明人浙派の泰斗戴  
文進の畫に做つた作などがあるから推し  
て、當らずとも遠からずであらう。

○霞樵

四十歳から霞樵、或は「霞樵者」など、  
書いた、此は九霞山樵を修したのである。  
時に戲墨に「歌杖」などしたが、あるが、  
霞樵と音便相通からの洒落れである。

○雲烟尙書、烟霞尙書、  
(偷春樓)

「雲烟尙書池無名題於甲戌仲夏偷春樓」と  
落款した竹石圖がある、甲戌は寶曆四年大  
雅三十二歳の時であるが、彼が好んで天下  
の名山水を踏破した意を含むものであらう  
と思ふ。又同様の義で、「烟霞尙書」と彫  
つた印があるが、是は霞尙の二字と霞樵と  
音便上から来る思ひ付きの洒落である。烟  
霞の尙書(尙書は秦時の官名)とは大雅に



ふさはしい風流な名である。

偷春樓、是も外には見受けない(或は他人  
の居齋の名かとも思ふが)齋號であるが、  
或は眞葛原の大雅草堂を興じて春を偷む樓  
なども書いて見たのかも知れぬ(樓は適  
切ではないが)

○藤菴、曼齋釣叟、

藤菴は二條と聖護院時代に用ひた別號の  
如うに思はれる(神木氏著妙蹟圖録所載山  
水有此款)曼齋釣叟(曼は小鴨)と共に鴨川  
を意味し、彼の「予五移居而不去鴨水云  
々」と山水に記した如うに廣義に見れば曼  
齋釣叟は京都の住人といふ事になる。

○亮

亮と云ふたと藤菴堂雜録に見るが、是は  
亮の字義から選んだのであらう。遺墨に未  
だ此款を見ないが、かの後の辰亮、清亮、  
定亮の名を考へると、蓋し大雅に亮の名の  
あつたのに因んだのであらう。

天衢道人、黃鸞深處

天衢道人は富士に登り天のちまたへ行つ  
たといふ如うな意、大雅が晩年の著書たる  
「名花十二種」の卷末に記して居る、即ち  
「烟拂雲蒸各樣新、鸞鳳翔見精神」  
天晴好是香風到 一百紅欄十二春」

天衢道人題于黃鸞深處

この黃鸞深處も一の齋號と見られるが、  
天才大雅大佛涅槃に入る前月にかいた、松  
下高土の一童を携へて立つある山水圖に  
「丙申晚春偶寫於黃鸞深處霞樵」と款した  
ものがある。  
猶、印文に見る萬章、逸生、玉皇公案吏、  
葛覃居(玉瀾の室號)半知半點先生等に就  
いて述べたいと思ふが、約束の日時の爲に  
此に擱筆他日に割愛する。雜用多端の中  
で、匆々の拙稿、記事順次を亂した個處も  
あり、文辭を修正の暇がない。讀者に諒を  
乞ふところである。

○蓮座より洋風の手帳出り、明治廿二年八月廿二日以降の  
日誌を九月末まで終了、予ハ此時分より日誌を考へ、  
此の法すことハ別ある、今の如く一定の冊子と書  
き、  
予ハ此の法すことハ別ある、今の如く一定の冊子と書  
き、  
予ハ此の法すことハ別ある、今の如く一定の冊子と書  
き、



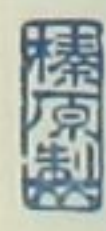
認めらるゝといふ此の日記の一也。此年ハ大隈伯の條約故  
正に閑し自分一身多忙と極め、是れ等の記事も  
以て満ちてゐる。東京ハ伯の條約改訂に反對の  
運動起り、是れと對抗する者も亦多し同志も断行  
運動を東京で行つた。自分の主筆する新聞も亦  
社論も亦小橋樁を流して其の衝に當らうといふ  
條約改訂七進の危急をうらむ、東京も亦予に出  
府せよと申し来り、是れも費用の出費も亦氣を  
かけて小橋樁に津日京を命じたこととて、日記中  
見えてゐる。不承くも東京も撰文を頻々と報して  
来るので、同志と協働して多量に形勢を報告し  
たりする。忙殺せんといふ。此運動も是れにして自

東京

かを助け他人の名も多く出てゐる。仰あひの坂口島  
山玉井、是れが小倉鎮に於て助勢の爲め、未だ  
数回余の家を在つた。同伯の経歴や、此の  
株の募集集や、是れも亦多し。此の日記  
の初め、曾祖母の七年忌、法要をこゝろまゝに  
てゐる。是れを行つたこと、日記に記してゐる。此れが  
真崎初め、此の法要、是れも亦多し。今も此れ概して和  
島の長女を真崎信城に嫁す。こと、此れ決して、此の  
記事も亦多し。此の日記、是れも亦多し。十月中、此れ  
は、大隈伯の銀行在勤中、不都合の  
事、是れも亦多し。余も未だ、家内の保証人、此れも亦多し。  
此れも亦多し。是れも亦多し。是れも亦多し。是れも亦多し。



あるを以てと敬うるを新編く成る玉井島山考と協成  
し比家、市の行くを不利と爲し、不食を以て行か  
ぬ比、ことどもを恵ひ起すが、此の事、終極を極め  
年、とせざるから、断片を以て此の詠ハ再集して  
て保存することとせられた。

此の詠中、當時自分の朱謀録を以て島山嘉と玉井  
貞大の「後仁一」を好む数多の人々の「皆故人」と  
いふ、自分の内人として一年の年長びあつたか、念七  
新編を著してから、古くは、此の年、某所を以て  
主宰し、後、此の某所、その事、某所、範圍に入り  
久しく横渡るゝ、此の末の娘が、留地、士、其、  
さん、此のを懐概し、零災、後、毀、此の、此、  


の事、嘉、道、に、新、し、懸、列、の、く、を、得、ぬ。

○玄田東伍が志、(一)根津、(二)不、(三)扇、(四)獨、(五)身、(六)  
志、(七)き、(八)り、(九)地、(十)名、(十一)稱、(十二)典、(十三)を、(十四)編、(十五)名、(十六)な、(十七)し、(十八)つ、(十九)あ、(二十)り、(二十一)し、(二十二)は、(二十三)ら、(二十四)る、(二十五)宗  
家が、(二十六)宗、(二十七)家、(二十八)を、(二十九)伝、(三十)して、(三十一)其、(三十二)の、(三十三)三、(三十四)四、(三十五)の、(三十六)学、(三十七)生、(三十八)を、  
自家が、(三十九)監、(四十)督、(四十一)して、(四十二)お、(四十三)れ、(四十四)か、(四十五)玄、(四十六)田、(四十七)の、(四十八)編、(四十九)名、(五十)の、(五十一)千、(五十二)信、(五十三)の、(五十四)役、  
等、(五十五)も、(五十六)毎、(五十七)日、(五十八)つ、(五十九)て、(六十)字、(六十一)字、(六十二)を、(六十三)や、(六十四)ら、(六十五)せ、(六十六)れ、(六十七)あ、(六十八)る、(六十九)日、(七十)の、(七十一)こ、(七十二)と、(七十三)一、(七十四)人、(七十五)の、(七十六)言、  
生、(七十七)か、(七十八)固、(七十九)子、(八十)改、(八十一)む、(八十二)名、(八十三)の、(八十四)あ、(八十五)ら、(八十六)暮、(八十七)暮、(八十八)を、(八十九)入、(九十)つ、(九十一)て、(九十二)暮、(九十三)暮、(九十四)を、  
喫、(九十五)し、(九十六)た、(九十七)折、(九十八)俾、(九十九)か、(一百)誤、(一百一)つ、(一百二)て、(一百三)熱、(一百四)湯、(一百五)を、(一百六)あ、(一百七)せ、(一百八)り、(一百九)千、(二百)と、(二百一)ふ、(二百二)ち、(二百三)ま、  
か、(二百四)し、(二百五)て、(二百六)爛、(二百七)傷、(二百八)を、(二百九)心、(三百)つ、(三百一)れ、(三百二)か、(三百三)其、(三百四)の、(三百五)言、(三百六)生、(三百七)の、(三百八)母、(三百九)の、(四百)家、(四百一)の、(四百二)説、  
ひ、(四百三)る、(四百四)の、(四百五)を、(四百六)承、(四百七)知、(四百八)り、(四百九)か、(五百)傷、(五百一)の、(五百二)念、(五百三)へ、(五百四)る、(五百五)ま、(五百六)む、(五百七)此、(五百八)家、(五百九)を、(六百)と、(六百一)ま、(六百二)ら、(六百三)ぬ、  
對、(六百四)る、(六百五)を、(六百六)こ、(六百七)泊、(六百八)り、(六百九)と、(七百)み、(七百一)あ、(七百二)ら、(七百三)の、(七百四)友、(七百五)人、(七百六)を、(七百七)見、(七百八)ぬ、(七百九)か、(八百)こ、(八百一)つ、(八百二)け、  
字、(八百三)も、(八百四)集、(八百五)め、(八百六)る、(八百七)暮、(八百八)暮、(八百九)を、(九百)馳、(九百一)走、(九百二)し、(九百三)述、(九百四)せ、(九百五)せ、(九百六)れ、(九百七)こ、(九百八)と、(九百九)が、(一千)あ、(一千一)る















○日本は書物狂ハ種々あり、是れが罪を犯し此例もあつた、併し書物の故もつて人を殺し此例をまゐり知らざりしが、西洋よりそんながある、書物風味に於ては、此例は、此が評載し、此のをサツと約して、その目と人うからる、前、而、西、牙、ポ、ロ、ト、修、多、院、の、貴、年、同、者、を、多、地、す、る、し、の、ム、ト、ン、ウ、イ、ン、セ、ン、ト、と、ま、あ、坊、を、ん、か、あ、つ、た、こ、ん、か、あ、思、儀、を、本、狂、に、従、り、さ、つ、つ、い、ろ、ろ、う、り、本、と、ま、ま、と、あ、思、儀、を、い、り、あ、り、か、そ、ろ、ろ、う、る、意、の、乱、脈、時、代、に、来、り、て、自、本、と、秘、う、る、者、殺、し、て、遂、に、本、身、の、業、を、多、く、よ、い、本、か、あ、ん、か、え、ん、を、穿、つ、て、深、く、隠、還、つ、て、決、し、て、人、に、受、け、ぬ、ま、う、ろ、く、侯、約、し、て、よ、い、本、か、あ、つ、と、情、を、論、せ、り、購、を、秘、死、し、た、れ、ん、或、



時、ある人の名が、セリ、受、り、ま、出、て、ま、う、や、ま、一、冊、を、産、の、い、の、か、あ、つ、た、ま、え、を、ま、う、あ、す、為、め、の、全、力、を、注、い、た、か、道、に、日、業、あ、の、オ、ー、グ、ス、ケ、と、バ、ウ、ラ、ト、ス、ト、と、い、え、や、ん、た、こ、ん、か、彼、の、の、犯、罪、の、海、因、の、い、の、説、多、く、あ、る、を、前、も、ま、う、大、失、心、死、ん、だ、の、い、の、ま、二、三、の、思、儀、を、死、を、逆、け、た、い、の、か、あ、つ、た、官、廳、の、い、ろ、ろ、う、り、手、を、ま、し、た、結果、と、う、く、疑、か、此、目、防、て、ん、の、か、つ、て、バ、ウ、ク、ス、ト、ス、ト、を、殺、し、を、得、た、を、を、あ、り、し、た、の、か、違、物、と、い、た、他、の、三、四、の、被、害、あ、る、は、皆、誤、書、家、に、此、坊、を、ん、か、一、且、を、も、受、り、ろ、ろ、う、り、後、に、情、し、く、ま、う、り、え、ん、を、ま、う、戻、す、お、め、の、殺、し、た、と、か、合、つ、た、と、ま、の、か、彼、有、甚、い、よ、う、ま、ま、い、る、花、の、愛、日、書、こ、思、を、う、け、て、あ、り、た、と、ま、



こんハマヅム、ボヴァリイの心あひまの自伝を讀んで、その  
 潮社より出版せらるるグスタヴ・フローベール(1832-1905)の  
 著年時代とそのものも、愛され (Bulbomania) の著者  
 まうり実話話のときよ



# 「春城會」記

(上) 築地「常盤」において

混いて驚かれたが會員の方でも  
 き手の先生が如何に努められたか  
 をお察し、たわけだ(高橋柳吉)  
 カット寫眞は書齋における市島  
 氏、下の寫眞は常夜の記念撮影

春城會の目的、春城會の目的は  
 當年七十四歳、春城會の目的を述べら  
 れた。平素先生の徳を慕へ、説へ  
 をつけた人々から成る「春城會」で  
 は先生の徳を記念しあはせて  
 説、痛飲に一分を過さず三月  
 十七日夜築地の旗亭常盤において  
 本年最初の集會を催した。先生の  
 誕生日は二月十七日であるが二月  
 は餘りにも寒さ厳しく、搞て、先  
 生の家族に邪を引込む人などあ  
 つた、三月に延ばしたものの、殘  
 寒徒らに長引く今年初の三月も中  
 旬を越ゆれど春色は淺く「春城  
 會」も暖かな五、六月の候に開いて  
 ほしいなどと缺席の村山勲氏  
 が意見、見蓋から意見を寄せた程で  
 ある。

當夜出席の人々は主客春城先生を  
 中心に  
 伊藤莊之助 石塚 三郎  
 大石 理園 大江 乙亥門  
 奥田 雲藏 河竹 繁俊  
 武田 尾吉 中野 謙平  
 紫安新九郎 村山勲之助  
 山田 清作 昆田 謙一  
 小久江成一 小林 堅三  
 寺島 元重 坂上 弘藏  
 坂口 献吉 平野 登美夫  
 森脇 美樹  
 の東京在住諸氏の外に上京中の  
 松井郡治、高橋友治郎  
 の兩氏が馳せ参じた、洋風を模す  
 賑々としたサロンで暖茶、歐談の

二十餘代ものが一人、樂る  
 のをきくなどこの際歳は少し  
 たものだ自分にはとも堪らぬ  
 少し、氣持になりかけた酒も  
 すつかり覺めてしまった  
 と一同の熱心に先づ軽い皮肉を  
 返すは左様の限運手とも  
 わが座敷界がうんだ種代の名手と  
 して、全世界に名を轟かしてゐる  
 舊慶應の慶田武一選手  
 が、ひとりテニスばかりでなく女  
 性に對しても、頗る辛辣なる手腕



藤原製







一あること日なつたの如く、彼等をして出陣すべしと  
述べさせし見ると大体左の如くである

宮本(西沢)の遺書を念む 二十卷

慶元(近)の古刻書 十一卷

慶元古流字本 八卷

雑 七種

旧刊(布)顯本展覧会別品中に見え  
るモノ 六種

大略右のことくである。追つて書目を掲げる

○文藝春秋社から特に社費が負担して来て故人追懐  
の稿を寄せてものと頼まんに、三日間没頭して木を  
墨亭板垣伯野の英世流字子音に就て十二行



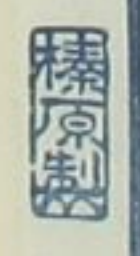
の便、又大に平枚書いたるも皆自分の感懐のみで  
可なり興味のあるやうな書に積りながら五十枚に  
多きと過ぐるから、氣がつかぬ流字子音にけり有き  
んへの報の、その(一)物語家録に収めることとし  
た。

○二三日前(近)の、おのり身功をまけに、おのりしく、  
後、戦けつたが、おのり山子を用ひた。程言が一ツある  
る、おのり山子、おのり山子のおとかし、  
其(一)きさるへと、おのり山子を盗み、おのり山子  
まに、おのり山子を盗み、おのり山子を盗み、  
疑うて、おのり山子と、おのり山子と、  
主つと、おのり山子を盗み、おのり山子を盗み、



生きは人間が控へてゐるの流棒、ヒツクリ仰天と云  
ふ滑稽な味があつておもしろい狂言だと評せんは他  
日女の狂言の文句と一後、いふより此品誰んか  
此の狂言を録する者いて貴くんれいと思ふてゐる。  
(三月廿八日記)

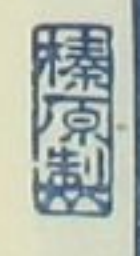
○岩波家の蔵書目録洋装二冊裏に字の跡を受  
けて余が架中へも存る、然れども余の欲する所とん在ら  
ずして和装本静嘉堂秘蔵志(廿五冊)に日録川田  
蕨の編より子もと又本を考証を附し書誌学を尤も  
感大なる資料なり、陸心深の碩宋橋齋花皆静  
嘉堂に帰して其の正本五千冊、抵ぬ此の誌中  
有り我即宋刻に富むといふ者も亦書を以て冠冕



と云ふ、余久しく得んと欲し得ず、日録、此人福橋  
輟二橋士此文庫を替すの故を以て其法を以て初  
めて其略を受く平のま吉いひて、川田蕨の跋  
河甚の静嘉堂に曰勤するの日余りも成くたふ  
て庫中の殊に籍を鑑覽し、且つ徳川田の語詞を  
受け愚説を陳へる事あり、此の目録編者あり予  
後因るまゝとて川田の序に云ふ岩波蔵し  
助、此書の出版を乞ふ事ありて予、川田を  
岩波家に紹介し、予重んじ橋士も亦此書の出版前  
報志すを知らず、不知川田の今健在る事や、余久し  
く其遺書を聴かば、  
三月廿八日記  
○○○の松平冠山公遺児の菩提の考らんと八年間を



寺一郡の観音一千寺を巡拜し一寺一詠の和歌を  
白筆の紙に記し得たを冠山の傍に一巻を置く  
事と事なす文偏にぬめを著し作らるる碑一又を  
讀んか見れば一千寺の観音を巡拜したることの孰も何人の  
記す所なきのやその傍に右の人のありしを宗政  
も宗政の経歴があつたとて佛の活判があつ  
たことが見えてある。亦に十教経の著書の中より  
淡草寺志十九卷に見えてある。淡草寺志は淡  
い淡草があらはらうといふや曰寺の排列中より冠  
のいろくの文書があつた。観音千寺を巡拜し  
終つた時にも淡草寺の傍を巡へて回向を執んじ  
る。冠山にまゝの子をたつたと云ふてあるが一方の



青い紙にまゝ記すと、冠山に山家がうへ九四十一の如  
側出とある。地分多き寺の人のある。冠山の律定寺  
宗尼倫、源姓招す氏。池田族、終殿親と稱し因  
幡園との支封がある。佐多のまゝある。寛政中  
佐多のまゝあることありし若し、この、佐伯彦毛利  
彦標、仁正寺、彦市橋長昭と、そして冠山彦の  
三人のあつた。冠山の河鞠に於て右の優れんといふ  
の野に多くの著書があつて、文人とあるが、礼と佐多  
して何人も交つた。昭和四年十月、まゝに千石七  
段と記す  
三月廿九日記  
○寺一郡の和歌の手録と云ふものありしを前年  
上方の和歌の手録をよむ今も手録とある。ある時







と七細の庚申の玉像がある。裸体の中、の像は器上、玉と  
ある。傍りより此の、真分の佛像のエロシヨシ中、の銘は  
みよか、焼ひ入ん比。千ベツト佛ももえつべき一基の佛の  
其の格を合分解し、詩るやうなるてみて、洋書と  
とが、刻さんてあり、夏う物もある。高、この多少の真と  
蔵、下、架中、のよ、と、土中、と、掘、比、徑、同  
直徑、五、分、程、の、犬、三、寸、計、り、梵、字、の、刻、が、隠、見、し  
る。其の、小、形、の、意、多、氣、の、名、を、架、中、に、刻、し、  
黄、楊、の、刻、し、た、仙、人、の、玉、像、の、額、を、腰、に、下、け、符、を  
つ、き、着、上、に、人、物、を、載、せ、て、み、よ、何、と、云、ふ、他、人、か、ま、ま、の、神、  
ま、い、が、こ、ん、七、架、中、に、帰、り、比、白、方、鏡、く、く、の、焼、物、の、物、  
頭、口、中、に、の、珠、が、こ、く、動、い、て、み、よ、こ、ん、へ、根、付、て、ある



から、平戸迄の、書、院、に、擬、し、た、よ、う、い、が、一、寸、お、お、し  
ろ、く、出、来、て、み、よ、の、況、天、皇、帝、盛、壯、の、玉、像、銅、製、  
て、掘、め、て、や、る、よ、う、に、刻、し、た、が、其、割、り、を、く、出、果、せ、み、よ、こ  
の、七、架、中、に、一、の、あ、つ、て、よ、い、と、み、よ、ある。尚、ほ、壇、大、利  
製、の、不、分、書、院、の、此、の、文、房、具、店、に、千、う、お、う、出、て  
み、よ、皆、ブ、ラ、ス、物、を、む、鳥、就、せ、ま、く、あ、る、が、自、分、の  
鶏、と、犬、と、を、辨、べ、比、日本、の、と、の、形、貌、を、述、べ、比、所、が  
あ、つ、て、一、種、の、説、か、あ、る、自、分、の、印、刷、字、院、に、比、此、就  
れ、比、印、刷、し、た、か、る、後、本、の、印、刷、の、大、き、さ、  
び、中、の、揮、筆、の、彩、も、ま、ま、の、施、し、て、あ、る、と、  
豆、大、の、眼、鏡、が、附、属、し、て、み、よ、先、年、印、刷、の、度、後、命、  
を、催、し、比、折、偽、又、偽、り、比、校、る、誤、本、と、心、つ、比、こ、ん、が



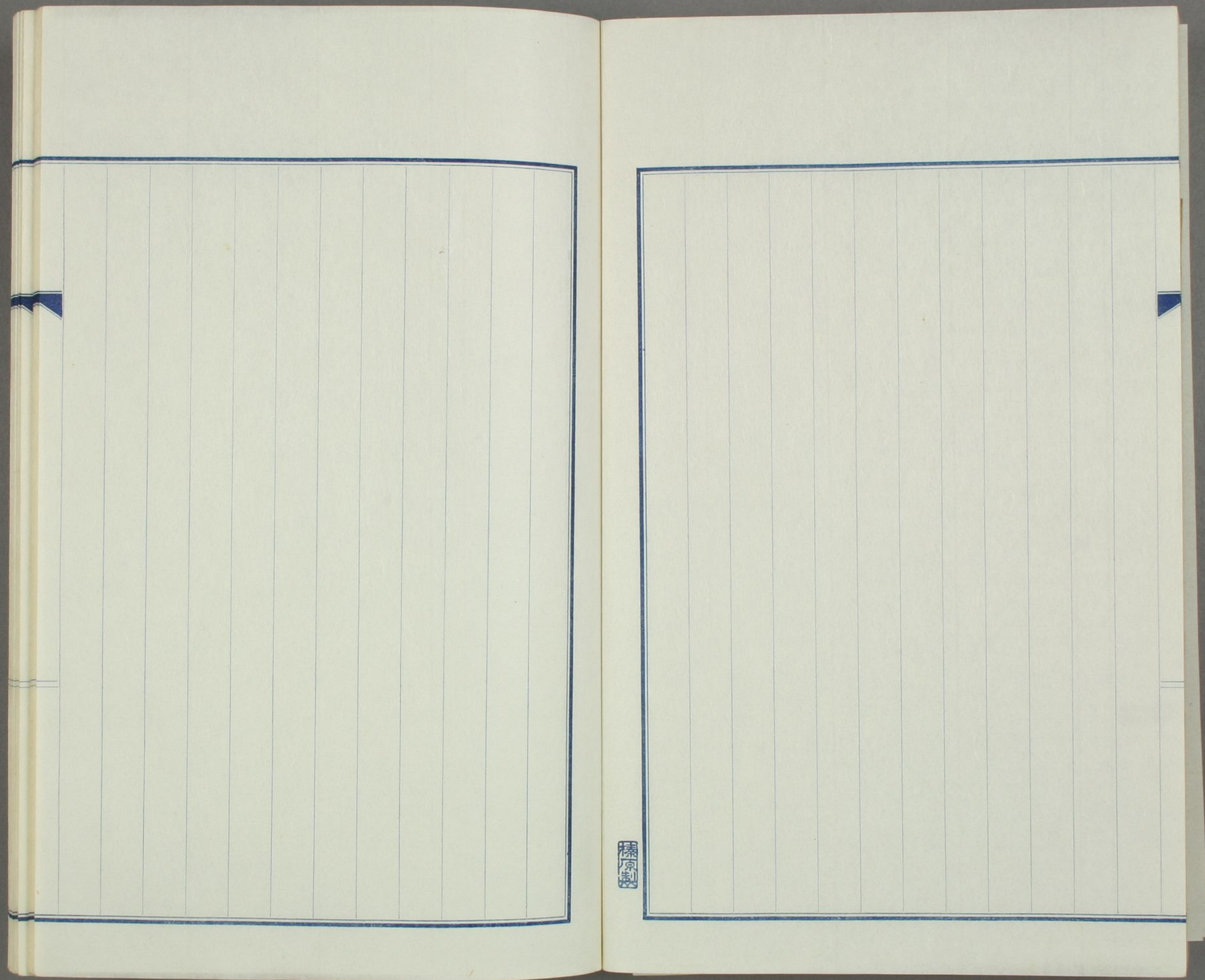






終ると呼ぶ人の世をこよめる。食物を與へることをせんじ  
食ふやあめのかつたのい、エキナリ杯洗のみさがづく  
呑んじ、夢の最後は指差す者がハリモニカを吹いて  
彼れを歌ひせしのを満しとめにとる。歌はけしき  
人聞まんらうらまのりんくひあつた。此の犬を訓  
練した人の高橋正雄とかまふことあひ、一タムを捉  
くと二十五年の拙筆をえると云ふ。 三十の記





Small, faint stamp or mark located near the bottom center of the right page.



以下  
6丁  
白紙



文藝 『近世名著標本集』刊行の趣旨

文化の進展を促すものは印刷術です。徳川期三百年の文化も、明治、大正、昭和、のそれも、主として印刷術の驚くべき發達の結果たるに外ならないのであります。言ひ換へれば、「活版」が利用されるやうになつたのが印刷術の一大飛躍なのであります。但し同じく「活版」といつても、徳川期のと現代のとは雲泥、月鼈です。徳川初期の「活版」は、木活字や銅活字でありましたから、ト、のつまり、整版に壓倒されてしまひました。「整版」とは書籍の一枚が版木一枚に彫刻された木製版の事です。ところが、現代の活字は、名は同じく活字ですが、素材が亜鉛で出来てをり、昔の活字のやうに一字々々に彫刻されたものではなく、字母の制用と機械の敏捷な作用によつて、大量的に且つ迅速に鑄造されるものなのであります。此の「彫刻」から「鑄造」への飛躍こそは、實に印刷術上の革命ともいふべきもので、今ではもう「汗牛充棟」などいふ比喩は全くの廢語だといつてよいほどに書籍の出版が盛大になつてゐます。此の様子では更にどこまで印刷術が進展するか、到底豫斷することが出来ません。が、將來は知らず、まだ／＼現在のところでは、印刷術上に尚ほ種種の不備な點が見出されます。左に其の一二を申して見ませう。

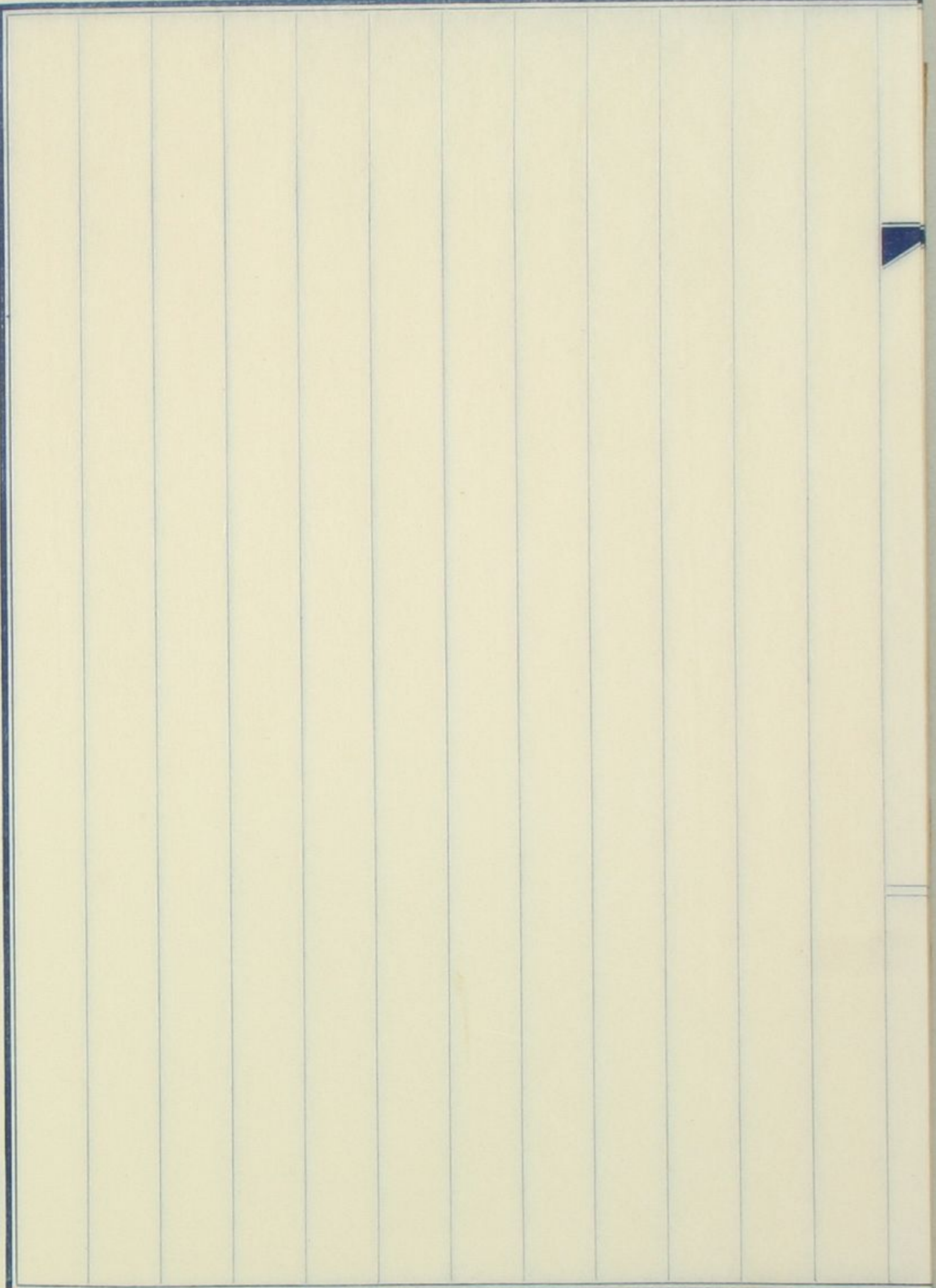
一 活字印刷の缺陷 鉛活字の驅使が自在になつた結果、新著と舊著とを問はず、苟も文字に關する限りは、如實に、完全に印刷し得られることゝなつたものゝ、そこに挿入されてある圖畫となると、さうはまゐらない。近來著しく向上した寫眞銅版や亜鉛凸版やオフセット印刷の如きものとても、まだ／＼鉛活字と並行し得る程度には進んでゐません。

例へば、徳川時代の上方版乃至同期の江戸刊行物の色なり味ひなりは、現在の印刷術や近い將來のそれでは到底表現することは出来ないと言つても過言でありますまい。ですから、古典の翻刻などは、逆も今日の活字印刷術では出来ない相談だとなるわけですが、凡そ文藝的作品の眞價は、其の時代及び其地方の感じや匂ひや味ひを、印刷の様式によつて、其の内容と共に、讀者に感受せしめるところにあるのですから、さうしてそれが作品を完全に心讀させる所以であるのですから、印刷様式といふものが非常に大切なものとなるのです。例へば、西吟の版下の「好色一代男」でこそ、西鶴自筆版下の「二代男」でこそ、それらの作品の眞髓が初めて完全に味讀される次第なのです。更に適切な例を挙げれば、「赤本」です、「黄表紙」です。あの挿繪、あの文字、あの紙質であればこそ、「赤本」なり、「黄表紙」なりの眞味が會得されます。今の活版で翻刻されたのでは「赤本」も「黄表紙」も何のヘンテツもないものとなります。果してさうだとすると、おひおひ埋滅に歸しつゝある徳川期の諸作品乃至明治以前の木版物は將來どうしたら味讀することが出来ませうか。問題の重點はこゝにあるのです。

二 標本集刊行の必要 文藝品を如實に味讀しようとするには刊行當時の原本に就くのが一等であることは言ふまでもありませんが、例へば、西鶴本一部の賣價が千何百圓、「黄表紙」の珍品一部が五十圓、百圓といふ現在では、それは言ふべくして行はれない事であります。のみならず、前述の如き次第で、到底現在の活版翻刻はまだ／＼頼むに足らないものだとすると、さてどうすればよいであらうか。どうすれば新時代の人々に我が過去の文藝史料の本體を理解させることが出来るであらうか。

原本の如實の複製といふ事がこゝに於て必要となるのであります。「稀書複製會」が過去十數年來、期を重ねること八回にまで及んで、犠牲的刊行を敢てして來ました理由は、實に爰に存するのです。稀書複製會の事業は、併し、いつれかと

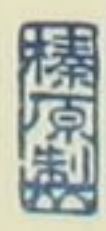




例へば、徳川時代の上方版乃至同期の江戸刊行物の色なり味ひなりは、現在の印刷術や近い將來のそれでは到底表現することは出来ないと言つても過言でありますまい。ですから、古典の翻刻などは、逆も今日の活字印刷術では出来ない相談だとなるわけですが、凡そ文藝的作品の眞價は、其の時代及び其地方の感じや匂ひや味ひを、印刷の様式によつて、其の内容と共に、讀者に感受せしめるところにあるのですから、さうしてそれが作品を完全に心讀させる所以であるのですから、印刷様式といふものが非常に大切なものとなるのです。例へば、西吟の版下の「好色一代男」でこそ、西鶴自筆版下の「二代男」でこそ、それらの作品の眞髓が初めて完全に味讀される次第なのです。更に適切な例を挙げれば、「赤本」でこそ、「黄表紙」です。あの挿繪、あの文字、あの紙質であればこそ、「赤本」なり、「黄表紙」なりの眞味が會得されます。今の活版で翻刻されたのでは「赤本」も「黄表紙」も何のヘンテツもないものとなります。果してさうだとすると、おひおひ埋滅に歸しつゝある徳川期の諸作品乃至明治以前の木版物は將來どうしたら味讀することが出来ませうか。問題の重點はこゝにあるのです。

二 標本集刊行の必要 文藝品を如實に味讀しようとするには刊行當時の原本に就くのが一等であることは言ふまでもありませんが、例へば、西鶴本一部の賣價が千何百圓、「黄表紙」の珍品一部が五十圓、百圓といふ現在では、それは言ふべくして行はれない事であります。のみならず、前述の如き次第で、到底現在の活版翻刻はまだく頼むに足らないものだとすると、さてどうすればよいであらうか。どうすれば新時代の人々に我が過去の文藝史料の本體を理解させることが出来るであらうか。

原本の如實の複製といふ事がこゝに於て必要となるのであります。「稀書複製會」が過去十數年來、期を重ねること八回にまで及んで、犠牲的刊行を敢てして來ました理由は、實に爰に存するのです。稀書複製會の事業は、併し、いつれかと









いふと、其の名の示す如く、餘りにも稀書に重點を置き過ぎた、贅澤といへば贅澤な出版なのです。随つて、斯道の専攻者には其の翻刻上の苦心をも諒察され、其の出来栄をも稱讃されました次第ですが、古圖書に比較的縁の遠い人々に取つては、やゝ一足飛びの氣味があり、餘りに高尚過ぎると思はれさうな程に珍書づくめになつてをります。言ひ換へれば、徳川文藝の高級品ばかりを集めた感があつて、年代的に順を追つて研究を始めようとなさる人々にとつては、恐らく不備とも物足りないとも感ぜられませう。必ずしも非常な稀書をとば言はない、又其の全部を、完本をとば望まない、凡そ世に名高い圖書である限り、それを系統的に、且つ類を盡して、せめて其の原影をば示して貰ひたいと希望される人々も多いでありませう。それと同時に、もつと手軽に、廉價に、といふ御註文もありさうです。これが『近世名著標本集』の刊行を企劃するに至つた動機なのです。

古語に「一鬮の肉を嘗めて一鑊の味を知る」といふのがあります。實際さういふ心の働きが人類には與へられてありません。心理學上に謂ふ類推作用は、名圖書の一部を標本として示された場合、その書の全内容をも鉛活版本で識りつゝ原本に就いて味讀したと同じ結果を受得する事だと思ひます。それには、恰も好し、今日の印刷文化がコロタイプの様式を提供してゐます。名圖書の善選された標本は、取りも直さず、一鬮の肉です。これを嘗めて、それから讀みやすい翻刻の活字本によつて味讀するといふ方法こそ、今では近世の名圖書を比較的完全に味ふために残された唯一の道であり、同時に實行の容易な方法であります。要するに、一鑊の味がこれによつて知られるのです。

「近世名著標本集」の刊行主旨は、一に篤學な研究者諸君に及ぶべきだけ多くの有益な資料を、及ぶべきだけ低廉な費用を以てして提供したいといふことに存するのであります。

## 選擇編輯の方針と刊行規定

以上の趣旨によつて『近世文藝名著標本集』を刊行するに當つて、左に選定方針を述べておきます。

**時代** 標本採擇の時代を「近世」としたのは、近世文學の出發點を慶長八年即ち徳川幕府江戸開府の當時として、それから慶應三年まで約二百五十年間に刊行されたものを主としたからであります。民間文學中の名圖書と限りましたものゝ場合によつては、自筆稿本や刊本の版下をも取入れることもありませう。

**枚數** 標本集は、毎月一回(下旬)に、四六倍判優良洋紙にコロタイプで印刷したもの十枚と、外に木版で手すき和紙へバレン刷りにしたもの一枚とを發行します。コロタイプの十枚は、原本の寫眞標本であり、木版の一枚は原本の摸造標本で、原本さながらの見本の役目を勤めます。

**解説** 書冊毎に必要な應じて、一個所乃至數個所の標本を示し、同時に標本と同じ大きさの解説を一書につき一葉づつ附けます。

**期間** 毎月コロタイプ及び木版で合計十一枚を刊行し、一箇年百三十二枚を以て標本集の第一期とし、近世二百五十年間に刊行された名圖書を、大略系統を立て、刊行します。そして第二期の二年目に更に百三十二枚を加へ、やゝ精細に系統を整へて中期を劃し、更に第三期の三年目の百三十二枚を加へ、總數三百九十六枚を以て大團圓とする豫定ですから、完全に近世の名圖書を網羅し得ると信じます。最後の月に「分類總目錄」をも發行しますから、それによつてそれらの標本を整理配列すれば、簡便な近世文藝圖書一覽が構成されるわけです。

**月報** 當標本集は解説の外に、毎月數頁の月報を附録します。それは標本集の次月の豫報もし、讀者との聯絡の役目



いふと、其の名の示す如く、餘りにも稀書に重點を置き過ぎた、贅澤といへば贅澤な出版なのです。随つて、斯道の専攻

もしますが、更に近世文學界の興味ある報道の役目をも勤めます。即ち單なる宣傳用の印刷物ではなく、徳川期文藝界の報道誌ともいふべき特色を備へたものなのです。

**限定** 當標本集は、限定版五百部の刊行です。往々世間には定期刊行物が、刊行早々、古本書肆の手に移り、古本として店頭に晒されてゐるのを見かけますが、これは其書の本質が持つ需要以上を刊行するがためです。當標本集はこれらに反し、需要よりも控へ目に刊行しますものであり、且つコロタイプを持つ完全なる刷上り目標に據る限定版ですから、他日古書肆の手に渡つて、珍本扱ひにされませうとも、刊行即時に、「古本」となるやうな憂ひはないものです。さういふ限定版ですから、品切れにならない内にお申し込み下さい。

**協選** 更に最後に御吹聴します。近來は「監修」とか「顧問」とかの名目を有名無實に濫用する例を發見しますが、當標本集の協選者は、全くそれらとは異なり、實際的に御協力下さる方々であります。特に此の事を御諒承しおき下さい。協選者 當標本集の豫約は、發行所米山堂へ御申込を受けるのを本位としますが、御便宜の書店へ取次を御依頼下されても差支ありません。

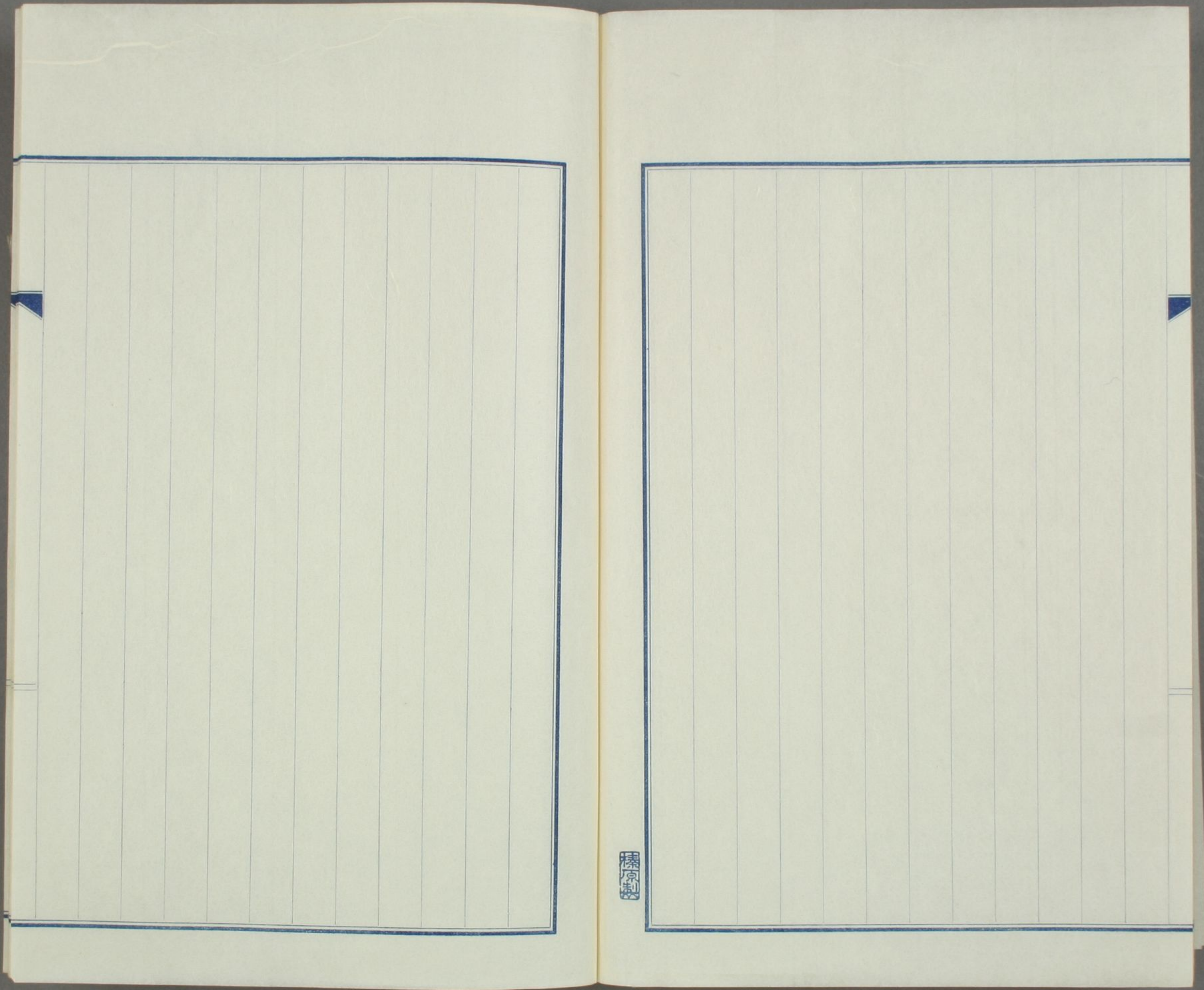
**會費** 一ヶ月壹圓。外に送料を申受けます。

**送料** 内地は毎月拾錢（書留御希望ならば拾五錢。臺灣、樺太、朝鮮、關東廳管内は拾六錢。東京市内は拾錢（集金料を含む）。

**拂込** 振替口座東京三三五〇九番米山堂宛、集金郵便ならば外に毎回手数料拾錢申受けます。東京市内は配本と引替に御拂込を願ひます。

**配本** 昭和八年四月より毎月下旬に一回。





標印



以下  
5丁  
白紙







# 人老十七ふ戀妻に俄

## らか廁の校學中は劑素

これは確實な

### 新しい『若返り法』

今春東西兩帝大で方法發表

#### 伊藤正雄博士の研究

中村厚治郎氏の手術で一時やかましい話題を提供したスタイナー博士の研究は、その後水溶性のないことと、再び老衰の状態に陥つた場合の治療法の不可能なる點などから今日では内分泌學史上の事實のみとなつて殆ど顧みられなくなつたが、スタイナー博士は、以来内分泌學の研究は世界各國とも長足な進歩を遂げ、女性ホルモンの研究に至つてはワオナーのラケール等の妊娠風研究によつて妊婦の尿中から性ホルモンの遊離に成功し、これがまた男性ホルモンの研究に一道の光明を與へ、遂にフンリ尿中排泄及その抽出法の発見となり、男性ホルモンの精製も亦得るようになり一時絶望となつたいはゆる『若返り法』もこれに並行して各國とも新方法の発見に至つた。わが國では成蹊の東京市養育院醫局の伊藤正雄博士が數年前から實驗中であつた男性尿抽出の性ホルモン筋肉注射法が、世界の臨床醫學界にさきだつて異常な好成績を挙げたので三月卅一日東京帝國大學醫學部附屬泌尿器科で開かれる内分泌學會で發表された。



三月三日京大で開かれる泌尿器科學會で發表される

#### 驗實法り返若 (前術手)



(後術手) 桑原重太郎

伊藤博士の方法は十七、八歳の青年男子の尿から抽出した男性ホルモンの精製液(去勢した雄鶏の尿)を注射したところ、性ホルモン注射によつて發育する状態から測定して得た單位によつて

**毎** 日一回四十九日間の治療を、注射を行ふものである。この臨床實驗につかつかつた患者は養育院に收容中の新瀉縣中魚沼郡出身桑原重太郎(一)、牛鹿町の行路病者新瀉縣人行井金蔵(二)外一各で、昨年九月廿五日から治療をつたものがハッキリして来た上に

**體** 重は平均五・三キロを増し、赤血球色素が濃増し、パネシト基礎代謝測定器に示された酸素の消費量の増加等、精神的にも、肉體的にも各患者の五年乃至十年間の状態を明らかにするに至つた。桑原重太郎の如きは今まで運動がハッキリしなかつたものがハッキリして来た上に

「この例だけでなく若返り法に成功したと考へられては世間の誤解を招きませう、しかしこの方法は或程度まで効果を維持するとも確信を得てゐますから若返りの一階梯を踏んだといへませう。患者に使用した男性ホルモンは神奈川縣立某中學校の便所から得た尿から川崎の帝國醫局で

**試** 験的に抽出して牛流動狀にまで精製された製剤を用ひました、幸ひ男性ホルモンによる臨床に相當な成績を得たので今度兩學會に發表致しました。

#### 持続性も確信

伊藤博士曰く

#### 淋

淋病は喜んで迎へてくれる言ひと誤へるにいたつた

同院内の掃除の手傳ひを自發的に申し出て「國へ歸りたい、國には知り合ひの婦人が

#### 鶏の寫眞説明

雄鶏に男性ホルモンを注射した鶏冠の發育状態【1】昭和六年十二月廿一日去勢した雄鶏の翌年二月九日の状態【2】同雄鶏に男性ホルモンを注射後(同五月九日撮影)【3】同雄鶏十日間注射後のとさかの發育を示す(同五月廿九日撮影)

光悦 大りのお

松山 山木君

